概要版

おおよどの地域文化財を学ぶ

－平成19～23年度「おおよど歴史学習会」事業実施報告書－

大淀町今木・泉徳寺の石仏

2013.3

奈良県大淀町教育委員会 編

刊行にあたって

奈良県内でも有数の大河・吉野川に育まれ、豊かな文化を営んできた我が町・大淀町は、縄文時代以来、人々が行き交う吉野地域の門戸として、また農・山村がふれあう地域文化の接点として栄えてきました。

大淀町教育委員会では、本町でよりいっそう地域に根ざした文化財の保存・活用事業を推進するため、町内各地域の歴史と文化を学ぶ「おおよど歴史学習会」を平成19～23年度にかけて町内各地でおこなってまいりました。このたび刊行の運びとなりました本書は、その成果の集大成といえます。

本書には、町内各地区の歴史と文化の個性、そしてその地区に残る文化・文化財の特徴を知るうえで、また、地域を守る住民と地域の文化財が、現在どのようにかかわりあっているのかを考えるうえで欠かせない資料をできるだけ掲載しました。本書を手にとっていただく皆様とその学習成果を分かちあえることは、我々にとってひとしおの慶びであります。各地の教育現場や研究機関で活動されている多くの方々、また地域のまちづくりを担う各種団体の皆様をはじめ、各方面で本書がご活用されることを願っております。

最後になりましたが、学習会の実施と報告にご配慮を賜りました地元住民の皆様と、ご指導を賜りました多くの先生方に、心よりお礼申し上げます。

平成２５年３月

大淀町教育委員会 教育長 水掫 義朗

例　言

1　この本は「平成19～23年度おおよど歴史学習会」（以下、学習会）の事業成果報告書の概要版です。

2　学習会の事業対象地は、奈良県吉野郡大淀町の旧大字地区（計21ヵ所）です。

3　この本で報告する「おおよど歴史学習会」は、大淀町教育委員会が以下のとおり実施したものです。

平成19（2007）年6月・8月・10月・12月・同20年2月（第１回～第５回　計５回）
平成20（2008）年6月・8月・10月・12月・同21年3月（第６回～第10回　計５回）
平成21（2009）年6月・8月・10月・12月・同22年2月（第11回～第15回　計５回）
平成22（2010）年6月・8月・10月・12月・同23年2月（第16回～第20回　計５回）
平成23（2011）年6月・8月・10月・12月（第21回～第24回　計４回）

4　学習会の実施体制は以下のとおりです。

実施主体　奈良県大淀町教育委員会事務局生涯学習課（職名は当時）
平成 19（2007）年度（生涯学習課長・坂本成寿、同課課長補佐・川崎隆子）
平成 20（2008）年度（教育次長補佐兼生涯学習課長・坂本成寿、同課課長補佐・辻本純成）
平成 21（2009）年度（生涯学習課長・吉村一夫、同課課長補佐・辻本純成）
平成 22（2010）年度（生涯学習課長・吉村一夫、同課課長補佐・宮坂和裕）
平成 23（2011）年度（生涯学習課長・上西昌博、同課係長・種田知子）

実施担当　奈良県大淀町教育委員会事務局生涯学習課　松田　度
（経歴）平成 17（2005）年 8 月 22 日より同課嘱託職員（学芸員）
平成 20（2008）年 4 月 1 日より同課・文化財技師
平成 22（2010）年 4 月 1 日より同課・主任技師

実施協力　大淀町大字各区（佐名伝区・薬水区・今木区・大岩区・鉾立区・岩壺区・矢走区・持尾区・芦原区・畑屋区・上桧垣本区・口桧垣本区・下渕連合区・土田区・越部区・馬佐区・新野区・北六田区・上比曽区・比曽区・出口区・増口区・西増区・中増区）および各区長・奈良県立橿原考古学研究所・同附属博物館・光明寺

5　この本の編集・執筆は、平成 24（2012）年 4 月から同 25 年 3 月にかけて、本町教育委員会事務局生涯学習課（松田）がおこないました。

6　学習会の実施にともなう関連資料の借用および記録・調査と整理作業、またこの本の作成・印刷に際し、多くの方々よりご指導とご協力をえました。文中でご芳名を記しお礼とします。

目　次

1　大淀町の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　学習会にいたる経緯　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

3　事業の概要（年度別）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4　事業の報告（地区別）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

佐名伝　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
薬　水　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
今　木　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
大　岩　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
鉾　立　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
岩　壺　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
矢　走　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
持　尾　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
芦　原　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
畑　屋　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
桧垣本（①・②）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
下　渕（①・②・③）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
土　田　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
越　部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
馬　佐　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
新　野　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
北六田　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
比　曽　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
増　口　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
西　増　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
中　増　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

5　まとめ　―地域文化財へのまなざし―　・・・・・・・・・・・・・54

奥　付

１　大淀町の概要

奈良県吉野郡大淀町は、奈良県中央部を西流する吉野川(紀ノ川)北岸の中流域にあり、広ぼうは東西11㎞、南北4.7ｋｍで、面積38・06ｋ㎡、人口は19,331人(平成24年２月末現在)で、現在は大淀町大字桧垣本2090番地に町役場の庁舎が建っています。

また大淀町は、紀伊・伊勢地域を東西に結ぶ伊勢南街道と、大和盆地から高取・龍門山地を越えて吉野へと達する南北の街道(芦原越、壷坂越、車坂越など)が通る交通の要衝で、町域には、国道（169・309・317 号線）と、６箇所の駅舎を経由して近鉄吉野線が走っています。名産品としては大阿太高原の梨や増茶などが知られ、規模は縮小傾向にあるもの、吉野地域の木材を扱う木材市場も多く、町内には町立の小学校（３）、中学校（１）と幼稚園・保育所（各２）、文化会館（あらかしホール・町立図書館）、平畑運動公園、健康づくりセンターがあり、町立大淀病院などの保健・福祉施設も充実しています。

近年は、近鉄福神駅を中心とした町西部の福神地区で、ニュータウン（花吉野ガーデンヒルズ）、植物工場（近鉄ファーム花吉野）、病院関連施設、メガソーラー（大規模太陽光発電施設）といった施設の整備も計画され、吉野郡内の次世代をになう地域として、奈良県内外から注目をあつめています。

この大淀町には、吉野川と吉野・高取山系にはぐくまれた文化・歴史遺産として、縄文時代から近代に至る文化財と文化的景観が数多く遺されています。大淀町教育委員会では、指定文化財(国指定 1、県指定３、町指定９)と各種文化財の調査、整備・活用をおこなっているほか、平成13（2001）年からは地元桧垣本地区にゆかりのある、能楽（猿楽能）囃子方の源流のひとつとされる「桧垣本猿楽」の掘り起こしをおこない、能楽の公演やちびっ子桧垣本座の活動などを継続しています。その他、地域に残る文化財の保存・管理は、文化財ボランティア（大淀町文化財調査会）による管理・活用方法や、地区全体で保存・管理を進めてゆけるような制度の導入を検討しています。

町立図書館には、郷土を代表する児童文学作家・花岡大学や能楽関連の図書をあつめた郷土史料等の閲覧コーナーもあります。また平成24（2012）年には、町立杉本記念文化センター内に「おおよど歴史展示室」が開設されました。さらに、地域の歴史学習会、公共施設等での歴史展示などを通じ、文化財保護とその普及活動が随時進められています。

2　学習会にいたる経緯

大淀町（教育委員会）にはじめて学芸員（嘱託職員）が配置されたのは、平成17（2005）年8月22日のことでした。大淀町では、懸案となっていた発掘調査（大淀町立大淀桜ヶ丘小学校改築にともなう大淀桜ヶ丘遺跡の埋蔵文化財試掘確認調査・町道東部４号線の改修にともなう史跡比曽寺跡の埋蔵文化財試掘確認調査）を12月までに終えた後、本格的に大淀町住民の文化財保護意識の向上にむけて「大淀町文化財調査委員会」（会長：故溝上正昭氏）が発足（12月26日）するなど、学芸員の配置をきっかけに、町の文化財事業を推進してゆこうという機運がたかまり、平成18（2006）年を迎えました。

当時、大淀町にとって学芸員が必要かどうかという議論もあるなかで、学芸員はできる限り各大字の隅から隅までを歩きながら、地域に残る文化財の現状把握に励みました。同年４月、町教育委員会事務局生涯学習課長（当時）・坂本成寿さんの発案に従い、学芸員は新規の文化財事業として、町内各地区の歴史と文化を紹介する連載記事を『広報おおよど』に執筆し、その研究成果を活かして町内各大字での「地域学習会」をおこない、行政と地域住民の協働によるまちづくりの基盤を歴史と文化の見直しから再構築する、という事業計画をたてることになりました。

『広報おおよど』への連載は、平成18（2006）年７月号から毎月、「おおよど歴史物語」というタイトルで、町の西端の佐名伝地区からはじまりました。このタイトルは『広報おおよど』の編集担当（総務課・当時）だった志水邦年さんの発案です。平易で読みやすく、決められた文字数のなかで的確に大字の歴史・文化を盛りこむという作業と、知らない地域でも実地で取材を重ねながらの執筆は、新米学芸員にとって苦難の連続でした。

こうして約１年間の連載を続けた後、平成19（2007）年６月から、町内各地域の歴史・文化について学習する「おおよど歴史学習会」がはじまりました。平成20（2008）年4月からは同学芸員が文化財専門職員として正式採用され、学習会の内容もより深みを増しました。この『広報おおよど』への連載は、平成22（2010）年７月で50回を機に終了、「おおよど歴史学習会」は、平成23（2011）年12月の開催をもって町東端の中増地区に到達、目標を達成しました。平成24（2012）年度はこの計24回の学習会の成果をまとめ、「事業実施報告書」として刊行することを目標に作業を進め、現在に至っています。

３　事業の概要（年度別）

この学習会は、生涯学習課の主催事業として、隔月で年５回（６・８・10・12・２月）、町の西から順に各大字地区でおこないました。初年度の平成19（2007）年度は佐名伝から鉾立まで、20（2008）年度は岩壺から畑屋まで、21（2009）年度は桧垣本・下渕まで、22（2010）年度は土田から北六田まで、23（2011）年度は比曽から中増までです。畑屋での学習会は２月の学習会が延期となり３月に実施しましたが、それ以外はおおむね予定どおりおこないました。参加者は合計で643名、平均すると１回に26名の参加があったことになります。最多は、増口での学習会で57名の参加、最小は比曽で７名でした。

学習会を続けるなかで、意見交換などをきっかけに、忘れられていた地域の文化財が発見される、というケースもありました（大岩・持尾・畑屋など）。また、学習会を通じて住民との密接なつながりができたことから、大淀町にとっての文化財担当者の必要性をより深く理解してもらえるようになったのも、この学習会の成果といえます。

学習会の時間は、多くの方が参加しやすい金曜日の夜間で、会場は地元の公民館等を利用し、必要な機材等は、主催者と区で準備できる必要最小限のものを使いました。とくに、地域からみつかった文化財（出土品）の展示や、パソコンをつかったスライドショーは、学習会の雰囲気をやわらげ、その理解をより深めるためにも必要不可欠のものでした（以下に、学習会の実施要綱と履歴を掲載します）。

「おおよど歴史学習会」　実施要綱	
目的及び方法	大淀町内の各地域に根ざした文化財保護の意識向上を目指す。
	各参加者の所蔵する文化財、歴史にかかわる地域情報等についても話し合う。
	スライドを使った学習会、参加者を囲んでの座談会。
	休憩時間を利用しての文化財展示見学。
	当該年度内の隔月開催（年５回）。
	大淀町広報紙『広報おおよど』にて「学習会のお知らせ」を掲載。
	生涯学習課員が司会・進行を務める。
	学習会の成果を今後の文化財保護・活用及びまちづくり事業に活かしてゆく。
対　象　者	一般住民（大淀町外からの参加も可）
場　　所	各地区公民館等
時　　間	隔月第三金曜日　午後７時００分～８時３０分
司 会・進 行	大淀町教育委員会　生涯学習課　学芸員（主任技師）

平成19～23年度「おおよど歴史学習会」履歴

回	年月日	内 容	会場	参加者(名)
1	2007.6.8	佐名伝の歴史と文化（佐名伝遺跡出土品の展示　ほか）	佐名伝公民館	30
2	2007.8.10	薬水の歴史と文化（薬水遺跡出土品の展示　ほか）	薬水コミュニティーセンター	20
3	2007.10.12	今木の歴史と文化（保久良古墳関係資料のパネル展示　ほか）	大淀町公民館今木分館	40
4	2007.12.14	大岩の歴史と文化（石神古墳出土品の展示　ほか）	大淀町公民館大岩分館	30
5	2008.2.8	鉾立の歴史と文化（清九郎関係資料の調査成果　ほか）	鉾立コミュニティセンター	20
6	2008.6.13	岩壺の歴史と文化（大日如来と蓮池の由来　ほか）	大日寺庫裡	20
7	2008.8.7	矢走の歴史と文化（矢走城跡の研究成果　ほか）	矢走老人憩いの家	23
8	2008.10.10	持尾の歴史と文化（持尾の年中行事・迎居家文書の公開　ほか）	持尾公民館	12
9	2008.12.12	芦原の歴史と文化（梵鐘とかずえ姫の伝承　ほか）	大淀町公民館芦原分館	12
10	2009.3.13	畑屋の歴史と文化（カンジョウカケの風習　ほか）	畑屋老人憩いの家	28
11	2009.6.12	桧垣本の歴史と文化①（桧垣本の神社と寺院　ほか）	上桧垣本地区公民館	30
12	2009.8.14	桧垣本の歴史と文化②（大淀桜ヶ丘遺跡の調査　ほか）	口桧垣本地区公民館	31
13	2009.10.9	下渕の歴史と文化①（石塚遺跡の謎を探る　ほか）	大淀町公民館車坂分館	26
14	2009.12.11	下渕の歴史と文化②（北町の歴史と文化　下渕城と万行寺　ほか）	大淀町立桜ヶ丘総合センター	22
15	2010.2.10	下渕の歴史と文化③（新町・西町・岡崎地区　光明寺の歴史　ほか）	大淀町中央公民館	37
16	2010.6.18	土田の歴史と文化（土田遺跡群の調査　出土品展示　ほか）	土田地区公民館	30
17	2010.8.20	越部の歴史と文化（遺跡の宝庫・越部　出土品展示ほか）	大淀町公民館越部分館	24
18	2010.10.15	馬佐の歴史と文化（妙楽寺の仏像群　田口・安佐谷の歴史　ほか）	大淀町公民館馬佐分館	28
19	2010.12.17	新野の歴史と文化（槇ヶ峯古墳　新野の宮座行事と神社　ほか）	新野地区公民館	24
20	2011.2.18	北六田の歴史と文化（万葉の時代から鉄道開通まで　ほか）	大淀町公民館北六田分館	30
21	2011.6.17	比曽の歴史と文化（比曽寺と世尊寺　比曽石　ほか）	大淀町立旭ヶ丘総合センター	7
22	2011.8.19	増口の歴史と文化（伊勢南街道　増口の偉人たち　ほか）	大淀町立杉本記念文化センター	57
23	2011.10.21	西増の歴史と文化（西増に残る伝承－豪傑「久右衛門」－　ほか）	西増老人憩いの家	20
24	2011.12.16	中増の歴史と文化（埋もれた「増」　新発見！中増の古文書　ほか）	中増ふれあい交流館	42
			参加者合計	643

平成19～23年度「おおよど歴史学習会」 開催会場位置図 （全24カ所）

4　事業の報告（地区別）

・佐　名　伝

平成19年6月8日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、佐名伝地区の歴史と文化について学習を進めました。はじめての学習会ということで、参加者が集まるかどうか不安もありましたが、佐名伝地区の住民をはじめ、町内外から30名の参加者をえました。

【地区の概要】

佐名伝地区は、昭和27（1947）年7月1日から大淀町に編入されていますが、もともと宇智郡（現五條市）に属していました。その歴史と文化は五條市域と近しい間柄にあります。

【学習会の成果】

学習会では、縄文時代後・晩期に遡る佐名伝遺跡の話、そして、鎌倉時代には興福寺の寺領「佐那手庄」となっていたこと、その歴史的背景がもとになっているとみられる、猿沢の池と水底でつながっているという「おいの池」の伝承などを、スライドを交えながらじっくり紹介しました。会場内には、公民館で保管されている佐名伝遺跡採集の石器（石斧・石棒等）がケース展示されており、発掘調査で古墳時代のカマド付き住居がみつかったときの写真パネル、この地にかつて伽藍をひろげていた寺院（称林寺）の正応２（1289）年銘のある梵鐘（現在は山口県長門市清月寺所蔵・山口県指定文化財）の写真パネルも展示され、この地域の歴史の深さにあらためて関心があつまりました。この「佐名伝寺」の歴史については、地元の住民から手がかりとなる小字の事を教えていただきました。たとえば、「チョボイ」はお寺の「長堀」ではないか、といった意見です。

【その後の経過】

佐名伝遺跡については、紀ノ川河川改修工事にともなう店舗の移設にともない、平成21（2009）年に試掘確認調査を実施しました。結果、水銀朱の付着する縄文時代後期の土器片などが出土し、遺跡（縄文時代の集落）の縁辺部（吉野川へと落ち込む段丘崖）の利用のようすが明らかとなりました。調査に協力していただいた故中西氏のおかげです（この成果はすでに2011年、『平成19～22年度大淀町文化財調査報告』として公表されています）。また、河川改修工事にともなう奈良県のその後の発掘調査でも、河川敷沿いに並ぶ石垣などがみつかっており、昔の伊勢南街道を考える手がかりとして重要な成果です。

佐名伝が生んだ児童文学者・花岡大学（1909-1988）については、その後平成21（2009）年度内の2010年１月から２月にかけて「花岡大学生誕100周年記念事業」を実施するなかで、地元の方々からご教示いただきました。ただし、明治以来の梨の栽培、佐名伝地区の近代化の歴史については、学習会で十分にふれることができず、今後の課題として残りました。

例年10月におこなわれる御霊神社秋祭のオカリヤ建て・オワタリについては、平成22（2010）年に文化庁の支援をえて実施した「大淀町地域伝統文化活性化事業」の一環で記録調査とイラストの作成を実施しました。より詳しい行事の歴史も、地域住民に聞き取りする事ができました。この成果も平成23年に報告書「大淀町の民俗―平成22年度の調査―」として公刊されています（町役場ホームページより無償でダウンロードできます）。

上記のような調査・研究成果の裏側で、ゴルフ場の整備にともない、サギスゲの自生する湿原の景観が失われ（『奈良県総合文化調査報告書-吉野川流域-』昭和29年で報告されています）、平成23（2011）年には河川改修工事により、猿沢池と水底でつながるという伝承のあった「おいの池」が姿を消しました。おいの池伝承地については、地元と工事業者の話し合いの結果、その故地に、往時をしのぶ解説板が設置される予定です。

おおよど歴史学習会（佐名伝）

01　学習会開始前

02　学習会風景1

03　学習会風景2

04　スライドショー

05 ミニ展示見学

06 ミニ展示見学2

07　ミニ展示見学3

08　座談会

・薬　水

平成19年８月10日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、薬水地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から20名の参加者をえました。

【地区の概要】

薬水（くすりみず）地区は、古い街道沿いに形成されたまちで、湧水が病気を治す弘法大師ゆかりの井戸と伝えるものが地名の由来となっています。学習会では井戸をめぐる伝承等を中心にスライドをまじえながら地区の歴史をふりかえってみました。

【学習会の成果】

薬水地区では道路整備事業にともない、平成14（2002）年、奈良県による発掘調査が実施されています。これを薬水遺跡と呼んでいますが、薬水コミュニティセンター付近では、鎌倉時代にさかのぼる建物跡と有力者の存在を示すやきもの（白磁）のほか、大きな「溜井」がみつかっています。学習会でもこの「溜井」と井戸の伝承の関係を、出土品をみながら考えた結果、現在の「弘法大師の井戸」と伝えている湧水の原形も、鎌倉時代にさかのぼって地区内に候補地が探せるのではないかと問題提起しました。地区の地名の由来をしめす伝承地・薬水の井戸については、平成17（2005）年度より大淀町文化財保護審議会で町指定文化財に指定するかどうかの審議をおこないました。これが経緯となり、審議会での審議対象として「伝承」を追加することが承認されました。ただし、井戸自体の年代が不確定である事、江戸時代にさかのぼる伝承と、今の井戸をつなぐ根拠史料がない、という点から、平成18（2006）年度の審議で指定を見送るとの意見がまとまりました。ただし、このことが、「指定文化財」という考え方でとらえきれない地域の文化財を、今後どのように守り伝えてゆくかを考えさせられるきっかけとなりました。

コミュニティセンターの南に位置する薬水八幡神社の境内には、遠くからも目立つ根周り５ｍの杉の巨木があります。かつては、この社叢に径1.5ｍをこえる杉の巨木群が林立していたようですが、いまは一本木を残すのみです。その境内に、福神の地名の由来となっている毘沙門天がまつられています。永禄３（1560）年、多門城主「松永壇丈」の弟・久忠が、この神社の西側の「城山」に多門城の出城をつくり、信貴山の守護神である毘沙門天の本尊を刻んで城の一隅に安置したことに由来する、というものでした（この記念碑は神社の境内に残されています）。この「城山」が伝承どおりの遺跡（城郭）かどうかは、本格的な調査をしてみないとわかりませんが、現地には「堀切跡」とみられる興味深い遺構が遺されているようです。

【その後の経過】

薬水地区は、奈良県の近代和風建築および近代化遺産の総合調査にともない、出合橋南側の田中家住宅が詳細調査され、薬水・福神地区の拱渠（きょうきょ）など、吉野軽便鉄道の遺産にもついても関心が高まっています。とりわけ、鉄道敷設にともない大正元年築造のイギリス積みレンガ造りの薬水拱渠は、水路と人道をまたぐ二連アーチのトンネルで、トンネル上部にかかる「薬水門」の額は、町の近代化遺産のシンボルとなっています。

現在、集落の西側をとおる新道が開通し車の通行が緩和された事もあって、福神駅から薬水駅まで、まちを貫く旧道をゆっくりとウォーキングする観光客も目だつようになりました。社叢・遺跡・伝承地から近代化遺産まで、地区内のさらなる「地域文化財」の保存と活用が望まれるところです。

おおよど歴史学習会(薬水)

01　学習会風景1

02　学習会風景2

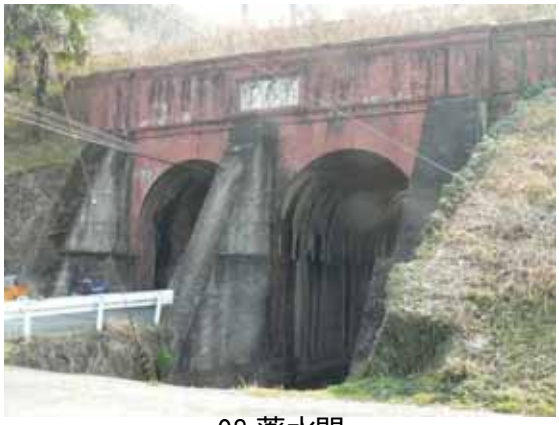
03　ミニ展示風景

04　ミニ展示風景2

05　展示状況

06　展示詳細

07 大師堂と薬水の井戸



08 薬水門

・今　木

平成19年10月12日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、今木地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から40名の参加者をえました。

【地区の概要】

今木地区は、平畑丘陵を源泉とする今木川の形成した谷にそって、街道沿い（現在の国道309号線）に軒を連ねています。地理的にも大和川水系の御所市域と密接なつながりをもつ地域で、吉野川流域とは異なる地域文化史を築いてきました。「イマキ」の地名が、古代の「イマキ郡」（高市郡の前身）ではないかとの指摘も、当然の結果といえます。

【学習会の成果】

学習会では、この今木地区の地域文化のあり方を、『大淀町史』の記載にもとづきながら参加者と再確認しました。まず、この地域に残された古墳と伝承、寺社と文化財を中心に、スライド等で解説しながら話を進めました。

とりわけ、大淀町指定文化財となっている蔵王権現堂の内外石仏群と山門の金剛力士像は、この地と修験道の歴史とのかかわりの深さを知るその代表格といってよいものです。泉徳寺は、役小角創建という「今木寺」の子院といい、蘇我入鹿の甲をまつるとの社伝をもつ氏神の甲神社には、湯立神事の際にもちいたとみられる安政２（1855）年の名をもつ鋳鉄の湯釜（現香芝市・五位堂の鋳物師による製作）が遺されています。この湯釜には「今木村大明神宮」とありますが、社伝を裏付ける史料とはいえません。「今城谷上」に設けられたと伝える皇孫・建王の殯塚（保久良古墳）の伝承も、その伝承の形成過程を詳しく検証する必要性を提起しました。今木地区でも各垣内（カイト）ごとに実施されている小正月は、ほとんどのカイトが、御所市域のそれと共通する高さが３～４m程のトンドを立てているようで、今も盛大に続けているとの話でした（2011年に町で記録調査を実施）。

【その後の経過】

平成24（2012）年６月、保久良古墳で初めての発掘調査が実施され、所有者（東山忠男さん）から古墳を含む敷地の寄付をうけ、７月に町指定文化財（史跡）となりました。この調査は、平成21（2009）年より古墳の雑木伐採と見学路の整備を継続的に実施している町の文化財ボランティア（住民）と町教育委員会の協働で実施された、いわゆるボランティア発掘です。東山さんも同ボランティアとしての活動が認められ、平成24（2012）年度の奈良県文化財保護功労者として表彰され、今では保久良古墳も、大淀町を代表する遺跡（古墳）の一つとして著名になりました。また、地元の名士・中野家は、古式の年中行事を個人宅で続けている旧家で、平成22（2010）年度に文化庁の支援を得て実施した「大淀町地域伝統文化活性化事業」のなかで、大雪の大晦日の日に「牛と馬のトンド」などを記録調査させていただきました。正福寺（寺ノ下）古墳については、中野家のご協力を得て、測量調査などを進めています。御所からこの今木谷を越え、車坂峠から平畑丘陵の頂上にある石塚遺跡をへて、吉野川へと下る「山上詣り」のかつての古道は、残念ながらすでに廃道となっていますが、その復興も地域活性化を視野に入れた課題の一つです。

さまざまな課題を残す今木地区ですが、さらなる学習会をかさね、地域と文化財の問題を深めてゆく必要があります。とりわけ保久良古墳は、奈良県をあげての「記紀万葉プロジェクト」に、大淀町が参画する場合の中核となる遺跡であるだけに、地域住民の意識や協働体制をどのように作ってゆけるかが今後の課題です。

おおよど歴史学習会（今木）

01　学習会風景

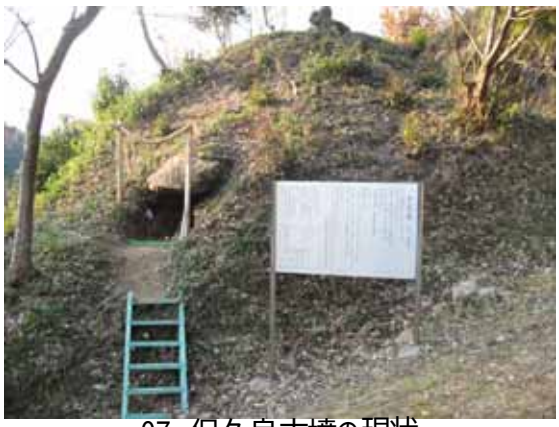
02 学習会風景2

03　パネル展示1

04　パネル展示2

05 権現堂山門の金剛力士像（阿形）

06　泉徳寺境内の石仏


07　保久良古墳の現状

08　タケル王イラスト（M．W）

・大　岩

平成19年12月14日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、大岩地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から30名の参加者をえました。

【地区の概要】

大岩地区は、民間のゴルフ場と町の経営するパークゴルフ場をかかえる山村で、かつては西大岩、東大岩にわかれ、各々の寺院と神社を擁していましたが、いまはその区別もほとんどなくなり、深刻的な過疎化が進行しています。

【学習会の成果】

学習会では、ゴルフ場の造成にともない発掘調査された大岩遺跡群（古墳群・墳墓群）の調査成果（奈良県立橿原考古学研究所編『大岩古墳群』1987年）のスライド等から、この地域が閉鎖された山奥の集落ではなく、御所と吉野の山越えの往還道沿いの歴史をもつことを紹介しました。とくに地元の住民が関心をもったのは、大岩という地名の由来でした。集落最高所の丘陵上に位置する石神古墳が巨石を用いて造られていることから、この巨石（おおいわ）が地名の由来ではないか、と話し合ったりもしました。

学習会で初めて教えていただいたのは「ヘイマさん」の事です。大岩神社に小祠をもつヘイマさんは、昔この大岩を救ってくれた人物だ、ということまではわかりましたが、それ以上の話は、地元の住民も詳しく知らない、という状況でした（このヘイマさんについては奈良出身の偉人であるということしか調べきれていません）。この八大龍王をまつる大岩神社（かつての水分神社）と大日堂にかかわる雨乞いの伝承は、すでにおこなわれなくなった雨乞い行事の内容を知るうえで貴重です。雨乞いにもちいる「泥」をとる高取町丹生谷の某所（ダイニチサンの井戸）もすでに忘却されて久しく、現在探索中です。地区内には、遺跡（古墳）・仏像、民俗、伝承・文化財が残っていますが、これらの歴史と文化をなんとか後世に残したいという表れを、この学習会でもかいま見ることができました。

【その後の経過】

石神古墳については、学習会でもその重要性が再確認されました。発掘調査がおこなわれた後、枡田慶之助氏（故人）が個人で草刈等の管理をしてこられましたが、所有者（奈良ロイヤルゴルフクラブ）や地元住民のご協力により、平成22（2010）年10月には大淀町指定文化財（史跡）に、平成24（2012）年３月には、奈良県指定文化財（史跡）となり、大淀町の文化財ボランティアによる見学路整備（階段の設置）を経て現在にいたっています。この数年で新しい解説板・道標の設置、石室入り口の鉄枠扉の改修など、吉野郡を代表する奈良県指定史跡として、ふさわしい姿にかわりました。

大日堂は、屋根瓦の風化と板材の腐食による雨漏りが激しかったため、地元により平成24年度に改修工事が実施されています。これにともない、めったに見ることのできない小建築の屋根組構造を記録調査させていただきました。屋根裏からは延宝８（1680）年の銘を刻んだ鬼瓦、墨書きの入った建築材など、多数の歴史資料が発見されています（これらは大日堂内にて保管される予定です）。この堂の正面向拝の上にかけられていたという鰐口は永享２（1430）年の銘をもち、相楽郡加茂にあった「東明寺」の什物であったことがわかります。町内に残る鰐口では最古のものです（平成23年度の第37回大淀町文化祭「歴史展示」で一般公開）。どのような経緯でこの大岩の地にもたらされたかは不詳ですが、記録等にも残されない貴重な歴史の手がかりとなる地域文化財のひとつです。

おおよど歴史学習会（大岩）

01　主催者挨拶（川崎課長補佐）

02　学習会風景1

03　学習会風景2

04　ミニ展示1

05　ミニ展示2

06　ミニ展示（子持器台蓋部）

07　ミニ展示の風景

08　大岩・大日堂近景（2006年）

・鉾　立

平成20年2月8日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、鉾立地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から20名の参加者をえました。

【地区の概要】

鉾立地区は、７軒の家で構成される、大淀町でもっとも過疎の進行した山村です。かつて、氏神・葛神社に接して建っていた浄土宗の寺院（円光寺）も廃寺となり、無住の寺院として、浄土真宗の光蓮寺だけが残っています（大岩・西照寺の荒木住職が兼務）。これが、世にいう「妙光人・清九郎」の菩提寺です（妙光人とは、泥の中で白い蓮華を咲かせるような清心高徳の人を指します。とくに浄土真宗の世界では、信心深い人のお手本として多くの伝記が流布しました）。清九郎の名は、全国的にも知られていますので、例年、各地からバス等での「清九郎詣り」が絶えません。大淀町を代表する児童文学者・花岡大学もかつて、清九郎を取り上げた長編小説『妙好人清九郎』（1966年）を執筆しています。

【学習会の成果】

前田さんをはじめとする檀家四件でお寺の世話役をきりもりする状況は、全国各地から参詣のある清九郎の存在あってのことです。学習会でも話題となりました。光蓮寺の堂内には清九郎ゆかりの品々が大切に保管されています。檀家・住職とも、参拝者にはできるだけの対応をしていただき、丹生谷山中にある清九郎の墓も、持ち回りでの清掃を続けておられます。

ところで、これとは別に学習会で話にでたのは、廃寺となった浄土宗の寺院の事でした。その本尊と什物は、光蓮寺の堂内で預かりの状態となっていますが、その檀家すなわち、鉾立の３軒は今、御所の浄土宗寺院に属しているとのこと。清九郎が当時住み、世に知られるようになる以前の鉾立村はどんなところだったのか、鉾立の地名の由来は何かなど、日本を代表する妙好人として名を知られるようになった清九郎の陰にかくれてしまった、この地域のかつての姿を明らかにすることも、今後の学習課題といえます。

【その後の経過】

平成24（2012）年６月には、京都の龍谷大学深草学舎で、妙好人に関する展示・講演会「妙好人における死生観と超越」（龍谷大学オープンリサーチセンター主催）があり、大淀町からも、鉾立の住民の方々を含め、団体で見学・聴講させていただきました。なお、平成24年7月に、堂内に保管されていた清九郎の紙芝居「妙好人鉾立清九郎・昭和23（1948）年11月製作）」「孝子ほこたての清九郎さん・昭和23（1948）年12月製作」を、高取町の夢創舘でのイベント（高橋成男氏による花岡大学の作品朗読とおおよど語り部の会による紙芝居）のあと、高取町観光協会のみなさんにも見ていただき、両町がともに楽しめる清九郎さんにまつわるイベントをしましょうと、話が進展しました。

なお、大淀町では平成25（2013）年に、清九郎ゆかりの地をめぐる見学会、妙好人に関する講演会等が予定されており、清九郎は今、そのふるさとである地元大淀町・高取町で静かなブームとなっています。

とはいえ、この偉人・清九郎の顕彰事業を、現在の鉾立の住民だけでまかなってゆくのは困難な状況です。地域観光などともからめた、旧村域を越える地域支援の連携が課題になっています。これをきっかけに、自治体の区域を越えた地域活性化が進めばと願います。

おおよど歴史学習会(鉾立)

01 主催者挨拶(川崎課長補佐)

02 学習会風景1

03 学習会風景2

04 学習会風景3

05 学習会風景4

06 光蓮寺

07 桧垣本八幡神社前の「清九郎」道標

08 紙芝居「清九郎」表紙

・岩　壺

平成20年6月13日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、岩壺地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から20名の参加者をえました。日が高く、定時になってもなかなか集まらないのを「ヨシノジカン」と笑いあう地元住民の明るさが印象に残りました。

【地区の概要】

岩壺地区は、大和川と吉野川の水系の分水嶺となる山間地で、狭い谷あいと小高い丘陵の上に民家が点在する高地の山村で、両地域の文化があいまみえる土地柄といってよいものです。この地域の方々は、吉野川の方を指して「カワヅラ」と呼んでおられました。

【学習会の成果】

大日堂は、すでに荒廃した本堂が取り除かれて墓地となり、残された庫裡に、本尊・大日如来の坐像ほかの諸仏が移されています。大日寺のゆえんたる大日如来は室町時代の作ですが、一般的な智拳印を結ばず、蓮のつぼみを抱えているユニークな造形です。寺の北側には、蓮池があります。池を守る旧家の植田さんに聞くと、この蓮が地区の年中行事でいろいろに使われた、川に流したり、供物を添えて辻に備えたりした、蓮池も、背後の山の急傾斜工事の際に重機が入るため道をつくったが、それで蓮がだめになり道をもどした、蓮の咲く時期になると、大日寺のお参りとあわせて地元の方々が見にくる、とのこと。

岩壺の地名は、後醍醐天皇の護持僧であった文観が、「大和州岩坪弁財天」の地で弟子の法蓮に普賢延命法を伝授したという興国３（1342）年の「東寺三密蔵目録」が初出とされていますが、地元の大日寺のたつ丘陵に設けられた弁天社の祠がその故地と伝えます（現在でも他所からお参りがあるそうです）。また、植田家に残されている『大淀町史』編纂時（昭和48年）にまとめられた「岩壺村史」（植田義蔵さん記述）によると、樋野村に住む「巨勢雄柄」が「先づ財宝を壷に入れて神に捧げ、永住の祈をささげて村名を「岩壷」と名付けた」といいます。岩壺の氏神は「葛上」神社といい、現在は剛力の神・タヂカラオを主祭していますが、本来は「九頭神」であった可能性もこの事例からうかがえます。岩壺の集落南方から平畑丘陵へとあがる坂道の頂部、森本家の北側に祠の跡があり、自生するエノキの巨樹がたっています。遠くからでも目視でき、地元ではナガモノさんといって、龍にみたてて尊んだとされ、平成９（1997）年に奈良県の保護樹木に指定されています。山間部で信仰される龍神の存在がここでも確認できました。なお、神事にともないトヤ（その年の行事の世話役）の家のカマドを清めるため、吉野川の水を汲み、小石をその年の月の数だけもって帰る、という風習もありましたが、すでに消滅した民俗です。小字「カンジョ」でも畑屋地区のようなカンジョウカケがおこなわれていた可能性があります。

【その後の経過】

ススキ提灯のでる秋祭りは、平成22（2010）年10月、文化庁の支援をうけて実施した「大淀町地域伝統文化活性化事業」の一環として、氏神・葛上神社でおこなわれる秋祭の行事のひとつ「子ども相撲」の記録調査をおこないました。この行事は、実際に相撲をとるわけではありませんが、「ワッタイ、ワッタイ。ワッタイヨー」の掛け声とともに、大人たちが子どもの介添えとして立会い、腕を回してやるかたちが、子どもたちの健やかな成長を大人たちが支えるという、この行事の本質を残しているとみてよいでしょう。ただしその起源は、明治初年をさかのぼることはなさそうです。

おおよど歴史学習会（岩壺）

01　主催者挨拶（辻本課長補佐）

02　区長挨拶1（上本氏）

03　区長挨拶2

04　会場風景

05　学習会風景1

06　学習会風景2

07　住民から1（植田氏）

08　住民から2（区長）

・矢　走

平成20年8月7日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、矢走地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から23名の参加者をえました。

【地区の概要】

大淀町を南北に横断する国道169号線「矢走口」から西へ入った山中に、矢走の集落があります。かつては小学校もあった地区で、大正７（1918）年に『大淀村風俗誌』を刊行した竹山清文（1867-1948）が教員を務めたのもこの矢走小学校でした。小学校の跡地脇には、大正３（1914）年に建てられた竹山の頌徳碑が遺されています。

【学習会の成果】

学習会は、地名の由来からはじめました。集落北端の「愛宕山（標高275m）」一帯が中世にさかのぼる山城の矢走城跡です。矢走は、「矢が走る」もしくは「矢合わせ」といった山城や古戦場にかかわる地名かなど、様々に推測されていますが定説はありません。

山城跡については、「森と水の源流館」の成瀬匡章さんによる踏査報告（「大淀町矢走で確認した城跡について」『青陵』2004年）があり、祠をまつる山頂付近に主郭（陣をはる区画）があり、山腹に小さな郭（平坦面）と竪堀（縦方向に掘られた溝）が散見されます。また、矢走から持尾へとぬける谷（小字シガイクボ）を挟んだ愛宕山西側の丘陵も、山城（仮称で「矢走西城」と呼称）である可能性が指摘されています。これらの城の年代は、近年採集された中国製の磁器（青花）のかけらから、16世紀代と推定されます。この「シガイクボ」の谷を北へと越えたところが小字「カンジョ」で、カンジョウカケ（ツナカケ）行事の痕跡も窺えます。ほかに、学習会で紹介した興味深い点は、江戸時代、この地が吉野郡龍門郷15ヵ村を治めた中坊家の所領として安堵され、地区内の松林寺にその代々領主の霊を弔う位牌が残されていることです。このようにムラと領主との関係は良好であったとみられ、この位牌も吉野を代表する文政元（1818）年の農民一揆「龍門騒動」の際、この地が一揆に加わらなかった経緯が窺える貴重な「地域文化財」といえます。

【その後の経過】

当面、矢走城跡を、地域文化財としてどのように守り伝え、活用してゆくかが、学習会でとりあげた大きな課題でした。地元の住民から要望されたのは、矢走城へむかうルートがわかりにくい、ということでした。手はじめとしては、道標や解説板の設置が求められましたが、町の財政には限りがあることも承知いただいたうえで、地元で自前の案内板をつくろうとの声もあがっています。

地区内では、大淀町の山間部に特徴的な龍神信仰、吉野川の水への信仰なども断片的にうかがえますが、すでに絶えた民俗・風習も多く、かつての山村の「祭礼記」をどう復元し、継承してゆけるか、困難な課題ととりくんでゆく必要があります。竹山清文の記した『大淀村風俗誌』については、大淀町文化会館主催の平成24年度あらかし土曜講座「100年前のおおよど」で、「明治・大正の大淀―大淀村風俗誌を読む―」（講師：松田度）のなかで、ひろく町内外の方々に紹介しました（平成24年10月27日実施）。講座参加者には、大正期の吉野郡内の生活文化を知る方も数名おられましたが、大半の方々がそれを知らない世代でした。手がかりとなる記録も少ない時代、それを一冊の本として残した竹山清文の業績は、今後も評価に値するものといえるでしょう。彼が長きに渡り教員を務め、そのモニュメントを残す矢走地区も、大淀町にとって忘れ難い近代化スポットです。

おおよど歴史学習会(矢走)

01 矢走区長挨拶(米田氏)

02 主催者挨拶(辻本課長補佐)

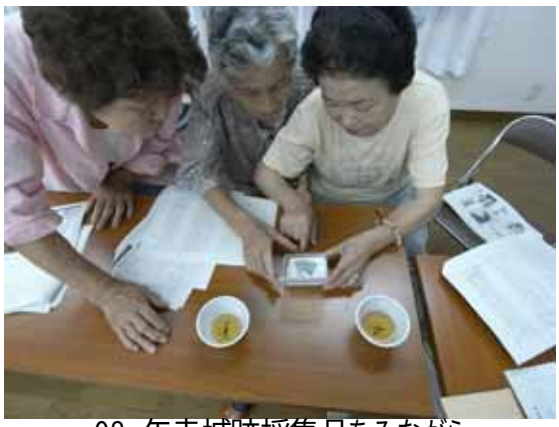
03 会場風景

04 会場風景2

05 学習会風景1

06 学習会風景2

07 学習会風景3


08 矢走城跡採集品をみながら

・持　尾

平成20年10月10日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、持尾地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から12名の参加者をえました。

【地区の概要】

持尾地区は、町北端部の山村です。山間部では、鉾立地区に次いで戸数の少ない（15戸）過疎進行地といえ、地域の抱える問題も学習会の前提となります。

【学習会の成果】

学習会をおこなうにあたり、この地を象徴する「地域文化財」は何かと考え、金蓮寺前にたつ庚申塔を中心に、民俗文化の話題を深めようかと考えていました。その矢先、地元の迎居茂實さんが、家で所蔵されていた古文書を学習会の会場に持参・公開されました。

この文書群は、最古の年号で文禄５（1956）年と記す中世文書を含んでいました。これまで大淀町内でみつかっている文書のなかでは最古の史料となります。さらにこの文書群は近世・近代に渡る膨大なもので、大淀町はては吉野のひとつのムラの歴史を語る一括資料として、大きな価値をもっていることがわかりました。

かつてこの地でおこなわれていた民俗行事については、浦西勉さん（現龍谷大学教授・本町文化財保護審議会委員長）による聞き取り調査が実施されており、今となっては貴重な記録です（浦西勉「吉野郡大淀町持尾の年中行事」『民俗資料聞き書き短信 –民具と伝承に関する報告-』1972年）。結晶片岩の青石を用いた庚申塔の建立もその名残です。また『大淀町史』によれば、この地区もかつては、岩壷・矢走同様、吉野川の水をとってカマドを清めていたといいますが、すでにこの風習もとだえている様子でした。

集落のなかに、比曽石（吉野川流域でとれる石英安山岩）を使った墓塔が残っていることや、結晶片岩製の石塔も建てられていることから、持尾地区もまた、山越えで吉野川とつながる往還路の一画にあることを示している、という話を紹介しましたが、かつてのムラのようすはすでに変容し、集落内の廃屋は増え、昔ながらの農家が朽ちてゆくのをとめることも困難ななかで、それでも、この地区に住む方々でムラを守ろうとされている意気込みが、学習会でも感じられました。

【その後の経過】

迎居家文書については、大淀町文化連盟文化財調査会と辰巳郁夫さん（大淀町元教育長・故人）、上田裕介さん（大淀町立図書館）のご協力により実施した平成21（2009）年度の「大淀町古文書講座」で、主要な文書の翻刻、概要の整理などをおこないました。その後の文書の整理作業は、所有者・迎居さんが少しずつ進めているのが現状です。

浄土宗・金蓮寺の本尊は、室町時代に遡る中国・宋様式のユニークな特徴をもつ薬師如来坐像でしたが、残念なことに火事で焼失。『大淀町史』（1973年）でしかその往時の写真がうかがえません。ただし迎居家文書には、この金蓮寺の創建期のようすを伝える古文書も残されています。迎居家文書の整理とさらなる分析が進めば、金蓮寺の創建事情や失われた本尊の来歴もわかるかもしれません。

学習会では、地元の過疎化の現状を目の前にしましたが、そのような中にあって、この地区の歴史と文化を守ってゆこうと努力をおしまない地域の底力を感じました。とはいえ、この熱心さを抱えた住民たちがいなくなった時の、文化財だけではおさまらない、地域コミュニティの存続の課題もあわせて議論が必要だと感じました。まさに大きな試練です。

おおよど歴史学習会（持尾）

01 主催者挨拶（辻本課長補佐）

02　持尾区長挨拶（山本氏）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　迎居家文書の展示風景

06　迎居家文書（文禄5年）

07　迎居家文書2

08　迎居家文書3

・芦　原

平成20年12月12日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、芦原地区の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から12名の参加者をえました。

【地区の概要】

芦原地区は、現在国道169号線によって分断されていますが、芦原峠（標高約300m）の南麓にひろがる街道筋のまちです。芦原峠といえば、今では国中と吉野をつなぐ大動脈のトンネルとして知られています。平成13（2001）年に「道の駅（吉野路大淀iセンター）」が設置されてから、芦原地区は吉野・熊野への観光拠点としてにぎわい、活気づいているようにもみえますが、内実は、それとはうらはらに、定住や人口の増加にはつながっておらず、過疎化の進行している地域でもあります。

【学習会の成果】

学習会では、氏神・姫神社の祭神・下照姫と正覚寺の梵鐘の「かずえ姫」に、いずれも「ヒメ（女性）」がイメージされる理由や、その伝承の背景を探る試みをしました。

「かずえ姫」は、地元の高齢者に聞くと「カゼサン（カズエサン）」と親しまれていたようですが、その墓碑（石塔）が集落の東、八幡山とよばれる丘陵の上に残されています。石塔は横倒しのままで周辺も荒れ、その存在も忘れられたような状況でした。この八幡山は正覚寺の墓地でもあり、カズエサンの石塔の付近にもいくつかの墓石がたっています。『大淀町史』の聞き取りによれば、この墓は真田幸村の末裔・土井家のものといいます。浄土宗・正覚寺に伝わる梵鐘は享保４（1719）年の鋳造、大淀町内に現存する最古級の梵鐘です。戦後、供出のために持ち出された梵鐘が戻ってきた、希少な由来をもっています。この鐘についても学習会で大きくとりあげましたが、正覚寺住職からは寺伝として、関ヶ原の戦いの後、九度山（高野山）へと隠遁した真田幸村の家来と子息がこの地に留まり、その娘をかずえ姫といった、という趣旨のお話を聞くこともできました。

この地の地名の由来「芦原」についても、意見が交わされました。その山中に大きな池（宮谷池）があって、そこに芦がたくさん生えていたから、芦の生える原野で芦原、という意見もありました。ただしこの原野の風景も今は残っていません。幹線道路（国道169号線）にトンネルがつくまでは、高取町の清水谷から、峠の集落・尼ヶ谷をとおって芦原へとぬける山越えのつづら折りをバスも越えてきた、とのことでした。また、旧道沿いに茶屋があり、カンジョウナワをかけたとか（小字カンジョ）、街道沿いの町であったからこその、街道の歴史の一端をうかがうこともできました。

【その後の経過】

芦原地区は国道の拡幅などにより、旧来の景観はすっかり失われました。しっかりと往時のようすを聞き取りしておく必要があります。かずえ姫の伝承については、平成24(2012)年、大淀中学校文芸部が紙芝居「八幡さんのかずえ姫」を制作するなど、その認知がすこしづつ町内で深まっています。姫神社の祭神が、かずえ姫とかかわるのではと学習会の際に提起しましたが、いまだに結論にはいたっていません。正覚寺の伝承も、史実の追求とあわせて更に深める必要があります。また、奈良県が実施した「近代和風建築総合調査」では、芦原地区の喜多家住宅が紹介されています（『奈良県の近代和風建築 奈良県近代和風建築総合調査報告書』奈良文化財研究所編 奈良県教育委員会 2011年）。芦原峠をめぐる交通史だけでなく、吉野の近代化の歴史の解明もこの地域の探究課題といえます。

おおよど歴史学習会（芦原）

01　芦原区長挨拶（喜多氏）

02　主催者挨拶（辻本課長補佐）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　学習会風景3

06　学習会風景4

07　座談会1

08　座談会2

・畑　屋

平成 21 年３月 13 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、畑屋地区の歴史と文化について学習を進めました。地区での不幸事と重なり、１か月順延して年度末の３月におこないましたが、地区の住民をはじめ、町内外から 28 名の参加者をえました。

【地区の概要】

畑屋地区は町北端部に位置する、国道 169 号線「畑屋口」から東へと向かった山村の集落です。今でこそ、過疎化の進む山奥の集落というイメージですが、かつては壷坂寺へとぬける街道がまちを貫いていました。道沿いには「つぼさか道」の道標も残っています。

また、エノキの巨樹が枝を伸ばす畑屋口の道路わきに、「南無阿弥陀仏」を刻んだ供養塔があり、人形浄瑠璃の演目として著名な「義経千本桜」に登場する忠臣「小金吾」の墓と伝えます。一帯はいま、この名をとって桧垣本地区の大字「金吾町」と名付けられ、今に至っています。

【学習会の成果】

学習会では、３つのテーマを設定しました。ひとつは、畑屋地区の交通路としての意味付けです。国学者・本居宣長の日記「菅傘日記」から、吉野～壷坂寺とおる「壷坂道」のひとつが、この畑屋をぬけるルートであったということが読みとれます。この宣長のとった「菅傘日記」のルートは、いずれも当時往還の多かった一般的な街道で、畑屋地区の「壷坂道」も、「壷坂詣り」の往還に寄与した主幹のひとつでした。

学習会でこの道の現状がどうなっているのかを訪ねたところ、この道は既に廃道となり、かつての道径もわからなくなっている、とのことでした（後日これを確かめに畑屋から壷坂寺までを歩きましたが、何度も迷うほど、道らしき痕跡もなくなっていました）。ふたつめは、東西の宮座講で協力して集落の谷口にナワをかけ渡す「カンジョウカケ」の風習のです。地元の住民からは、これまで一度断絶しながらも、行事を続けてきたいきさつを教えていただきました。正直なところ、伝統行事を続けてゆくのは大変だが、やめるにやめられない事情もあって、続いているのだという内容でした。

学習会でこのナワのかたちは、町の山間部で特有の龍神（氏神・天水分神社の祭神・八大龍王・九頭神）にみたてられているのでは、という問いかけをしたところ、おおむね理解を得られたようでした。みっつめは、天水分神社の祭礼（湯立神事）でもちいられていた「湯釜」のことです。長らくその所在は不明でしたが、この学習会を機に、ふたたび住民にあいまみえることとなりました。室町時代の文明 11（1479）年の銘をもち、「畑屋」の地名の初出資料としても貴重な「地域文化財」で、詳細調査は今後の課題となります。

【その後の経過】

畑屋地区も、いうにおよばず過疎化の進行が著しい場所です。とはいえ、遠方からこの地区に移り住み、セカンドハウスと畑をもっている新住民もいる、という話も聞きました。これを聞いた時、これからの地域の活性化という問題は、地元住民以外の方々に対して、その土地の魅力をＰＲする方法が必要では、ということを感じました。この地域政策の課題に、学習したような「地域文化財」がどうかかわり、地域を支えてゆけるか、という議論を重ね合わせてゆく必要がありそうです。カンジョウカケについては、平成 22（2010）年 12 月、に文化庁の支援をうけて実施した「大淀町地域伝統文化活性化事業」の一環で記録調査をおこないました。それ以降もこの風習は、途切れずに続いています。

おおよど歴史学習会（畑屋）

01　主催者挨拶（辻本課長補佐）

02　区長挨拶（中尾氏）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　学習会風景3

06　学習会風景4

07　集落内の壷坂道の道標

08　畑屋口の小金吾の碑

・桧　垣　本

平成 21 年 6 月 12 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、桧垣本地区のなかでもとりわけ上桧垣本の歴史と文化について学習を進めました。地区の住民をはじめ、町内外から 30 名の参加者をえました。また、続いて 8 月 21 日に実施したおおよど歴史学習会では、口桧垣本の歴史と文化、そして、桧垣本地域の歴史学習会のまとめをおこないました。この集いも、31 名の参加者を得ることができました。

【地区の概要】

上桧垣本地区は、国道 169 号線沿いにひらけた農村でしたが、高度経済成長とともに人口が急増し、商工業も盛んとなりました。地区内には、21 世紀の幕開けとともに開庁した大淀町役場の現庁舎（2000 年 12 月定礎）が建っており、隣接する大淀町文化会館（1997 年開館）とあわせて、大淀町の政治・文化の拠点地域となっています。口桧垣本地区は、吉野川に南面し、国道 169 号線と 370 号線が交差する交通の結節点（かつてこの付近を札の辻といいました）を基点とした街道沿いのまちで、商工業の盛んな地区といえます。

【学習会の成果】

平成 13(2001)年から町をあげてその掘り起こしにとりくむ能楽のルーツのひとつ「桧垣本猿楽」については、地元桧垣本地区に古文書、猿楽関係資料が残っていないことから、その実態は不明瞭なままでした。

学習会では、地元に残る文化財（仏像・位牌）や石造物（石灯籠・墓石）、伝承などから、室町時代に真言宗系となっていた観音寺、吉野の八幡信仰の拠点・桧垣本八幡神社を含む、吉野・高野の「世界遺産ネットワーク」を背景として、14 世紀末から 15 世紀初頭の応永年間には確実に、吉野の八幡信仰の拠点・桧垣本八幡神社を拠点とする芸能集団が存在していた可能性を考えました。ただし、明治期の「寺院明細帳」などに記載がある平安時代の創建伝承は年号の記載等に誤認も多く、後世の創作である可能性が高いと思われます。

平成 17（2005）年に発掘調査がおこなわれた桜ヶ丘小学校グラウンド東部の江戸時代の遺構については、埋納銭、埋納刀、数珠玉が出土する「まじない空間」であること、残された小字名「天ノ本」の由来などから、江戸時代前半期までこの地に所在した神社地の一部ではないかと解釈し、参加者の理解がある程度得られました。

江戸時代に、桧垣本猿楽の太鼓方「與左衛門」と同じ「與」という一文字を代々の名前に冠していた森本家をはじめ、桧垣本に残る（残っていた）旧家（丸井家ほか）の中に、猿楽にかかわった家系が存在していた可能性もあります。この旧家の史料から、あらたな手がかりを探ることも今後の課題です。

【その後の経過】

桧垣本猿楽は、「能楽プログラム」としての事業も 10 年を過ぎ、ほぼ住民の理解を得るまでに定着したとみてよいでしょう。しかし、地元地域に根付いた伝統文化の継承というかたちにはなっていません。平成 22(2010)年には、口桧垣本区作成の『口桧垣本むかしむかし』という冊子ができました。地元の方々が、地元の言い伝えや昔話をコンパクトにまとめたものです。平成 23(2011)年には、地元の上野隆治さんに、講談「お俊・伝兵衛」をまとめた、明治 44(1911)年ごろの版本を町に寄付していただきました。本町の桧垣本・土田の地名が文中に登場します。この講談者は、大阪の神田伯海（3 代目か）という人物で、当時 50 代くらい、各地で講談をおこなっていた人気物のようです。

おおよど歴史学習会（桧垣本1）

01　上桧垣本区長挨拶（松室氏）

02　主催者挨拶（高橋教育次長）

03　学習会風景1

04　座談会

05　観音寺･千手観音立像

06　地区内にある石灯籠の寄進者銘

おおよど歴史学習会（桧垣本2）

01 区長挨拶（北氏）

02　主催者挨拶（辻本課長補佐）

03　学習会風景（スライドショー）

04　学習会風景2

05　学習会風景3

06　閉会挨拶（高橋教育次長）

07　桧垣本八幡神社

08 桜ヶ丘遺跡（銭貨がみつかった柱穴）

・下 渕

平成 21 年 10 月９日（金）、12 月 11 日（金）、そして年明けの平成 22 年２月 10 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、下渕地区の歴史と文化について３回に分けて学習を進めました。参加者はそれぞれ、26・22・37 名（合計 85 名）でした。

【地区の概要】

下渕地区は、近鉄吉野線下市口駅を基点とする商店街をもつ町の交通・経済・産業の中心で、農業も盛んな地域でもあり、名所・旧蹟が各所にあります。

【学習会の成果】

10 月９日の学習会では、町指定有形民俗文化財（信仰遺跡）として知られている石塚遺跡を題材としました。石塚遺跡については、現在、大和下渕行者講（代表・森眞順）が管理団体となっています。この行者講は、吉野山・金峯山寺の大峯修験本宗とつながりが深く、石塚遺跡も同様に、修験道とのかかわりで語られることが多かったようです。

ところが、大正年間に行者堂へ移築された、石塚遺跡にともなう石造物（鎌倉時代の正和４年の銘文と寄進者の名前が残されている）などを検討すると、かつての石塚遺跡は、当時民衆にひろまった仏教のひとつである「六斎念仏衆」とのかかわりが深いようです。石塚遺跡を信仰の対象として守ってきた住民もいれば、そのように考えない住民もいます。石塚遺跡じしんがさまざまな遍歴を経て、今の所有者にうけ継がれているということを、学習会では話し合いました。ただし、その築造年代や、構造、歴史的評価など、将来の本格的な調査・研究は時間をかけて後世にたくすのが妥当だといえます。

12 月 11 日の学習会では、下渕・北町地区の歴史的地名「畦中、天王（天野）」や、万行寺とその由来地（ドンガメ・堂亀）の話、城ヶ峯の遺跡など、下渕地区の中央部、北町を中心とした歴史と文化について学習を進めました。

下渕・北町地区は、約 20 年前に刊行された吉野郡同和教育推進連絡協議会（西島正数ほか）編『北町部落の沿革と伝承考』や、奈良県部落解放研究所編『奈良県被差別部落史　資料集 第６巻』（1989 年刊行）をはじめ、多くの書物でとりあげられていますが、部落差別、同和問題とのかかわりで語られることが多かった地域です。今回は、このような視点をいったん白紙に戻して、残されている地名と、発掘調査などの最近の調査・研究成果をもとに北町地区の歴史を復元することを試み、参加者との対話を進めました。

桜ヶ丘小学校と町水道部のある丘陵地には、桧垣本地区のなかに下渕地番が入り組んだ小字「天ノ本（てんのもと）」があります。ここでは平成 17（2005）年、大淀桜ヶ丘小学校の建て替え工事にともない発掘調査が実施された際、江戸時代前半期の「まじない穴」が確認されています（大淀町教育委員会編『平成 17・18 年度 大淀町文化財調査報告書―史跡比曽寺跡・大淀桜ヶ丘遺跡―』2008 年刊行）。地元の皆さんの話では、この地をむかしは「天王山（てんのうやま）」と呼んだそうで、これに対して北町地区は、江戸時代の 18 世紀ごろには「畦中村」と呼ばれていましたが、19 世紀の幕末の史料には「天野（てんの）」とも書かれています。上記のことを整理しながら、学習会では、「天ノ本」が、北町（天野）ゆかりの地であるために「てんのもと」と呼称され、当地でおこなわれた「まじない」にたずさわった人々の故地でもあることから、下渕村へと編入されたと考えました。

続いて、大淀町役場の地にあった「宮池」の水利は桧垣本、北町北部にある「ドンガメ池」「新池」の水利が下渕と、その権利が明確に分かれていることをとりあげました。江戸

時代に「畦中惣道場」と呼ばれた万行寺の故地も、この「ドンガメ」にあったといいます。学習会でも、北町地区の人々が江戸時代からこの「ドンガメ」を重要視していたことに注目し、江戸時代に「天ノ本」の人々が畦中村に移った理由も、江戸時代の畦中村の文書に記すような、下渕と桧垣本地区の水利権争いが背景にあったと考えました。参加者の皆さんは、このような、同和問題とは異なる視点からよみとく北町地区の歴史と由来について、新鮮なおどろきとともに、おおむね納得されていたようでした。

そして、今後も行政と住民がいっしょに、大淀町全体の歴史のなかに北町の歴史を位置づけ、もっと明瞭なかたちで北町の地域性を明らかにしてゆこうと約束し、学習会を締めくくりました。

2月10日の学習会では、下渕・新町・西町・岡崎地区の歴史について学習を進めました。この地区の歴史を考えるうえで最も重要なポイントは、浄土真宗・光明寺の歴史です。かつては天台宗寺院であったとされ、16世紀初頭の室町時代（永正年間）には現在地よりも西方の地（丸屋垣内）ですでに真宗寺院としての伽藍を備え、江戸時代の元禄４（1691）年ごろ、伊勢南街道が開削されたのを機に、現在地「堂の辻」に本拠を移したとみられています。永正９年（1512）の銘をもつ光明寺阿弥陀如来画像（裏書に銘と「下淵」の地名が見えます）は本町最古の絵像（画像）で、若干色落ちはしているけれども、精巧な截金（きりかね）細工による輪郭と瑠璃（紺）の背景色を基調とし、白毫に胡粉を、淡い肉髻と口唇には朱を施しています。保存状態は良好です。所有者（光明寺）にうかがったところ、保存管理上、これまで公にされることは少なかったとのこと。しかし、昨年（2008年）からは彼岸の行事などの機会に、地元の檀家対象にご開帳を始めたということでした。学習会ではこの画像からうかがえる下渕の歴史について、光明寺坊守・三浦亮子さんからお話をいただきました。参加者には、下渕に貴重な文化財があることを再認識していただけたと感じましたが、信仰の対象でもある本画像の公開は、防火・防災の体制づくりと並行して慎重におこなわなければなりません。今後少しずつでも地元地区（駅前商店街）の活性化とあわせて、多くの人々の目にふれるようになればと思っています。後の座談会では、町名「大淀」のもとになったとされる鈴ヶ森から「座頭渕」にかけての吉野川の話、下渕八幡神社、小字名、千石橋や渡しの由来など、まだまだ話が尽きない様子でした。

【その後の経過】

平成21～24年の間に数回、石塚遺跡を信仰の対象としてまつる大和下渕行者講の森眞順師と話す機会を得ました。石塚遺跡の将来的な整備について、町指定文化財としてのとりくみをあらためて検討してほしいとのことでした。まとまった整備事業は長期的な課題として考えながら、見学路の整備や年数回の草刈等、行政やボランティア、講の方々、地元住民が協働でおこなう短期事業を考えてゆく必要があります。

また、地区内にある桜ケ丘総合センター主催の歴史・文化教室「おおよどのむかし話」（平成22年度・全４回）と「下渕のむかし話」（平成23年度・全５回）では、少ない参加者でしたが、下渕八幡神社や光明寺・商店街付近の歴史など、学習会で課題となっていたことを再度、地元・下渕の住民に聞くことができました。また、地区在住の森智津子さんには、和洋折衷の珍しい建物、昭和29（1954）年築造の森家住宅をご案内いただき、町文化会館主催の平成24年10月のあらかし土曜講座「100年前のおおよど」のパネル展示に際し、所蔵されていた千石橋の古写真などをご提供いただきました。これら下渕の近代化・現代化遺産の認識と活用についても、今後の研究課題となります。

おおよど歴史学習会（下渕1）

01　車坂区長挨拶（岡村氏）

02　主催者挨拶（高橋教育次長）

03　スライドショー風景

04　学習会風景1

05　学習会風景2

06　閉会挨拶（高橋教育次長）

07　石塚遺跡

08　同 五輪塔（水輪以下は復元）

おおよど歴史学習会（下渕2）

01　主催者挨拶（辻本課長補佐）

02　北町連合区長会長挨拶（岸本氏）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　学習会風景3

冊子「北町部落の沿革と伝承考」（表紙）

おおよど歴史学習会（下渕3）

01　主催者挨拶（辻本課長補佐）

02　学習会風景1

03　学習会風景2

04　光明寺についての講話（三浦氏）

05　質疑応答1

06　質疑応答2

・土　田

平成 22 年 6 月 18 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、土田地区の歴史について学習を進めました。戸外に出にくい雨天にもかかわらず、参加者は 30 名と盛況でした。

【地区の概要】

土田地区は、吉野川に並行して東西に走る国道 169 号線沿いに面したまちで、江戸時代は大和国ではめずしい紀州藩の領地として伝馬がおかれていました。北部の丘陵地には南大和ニュータウンをひかえ、新旧の地域住民が地区内に共存している、大淀町を象徴するようなまちです。

【学習会の経過】

当地区の歴史を考えるうえで最も重要なポイントは、縄文時代から古代まで続いた土田遺跡の歴史的評価です。平成４（1992）年と平成 14（2002）年に奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が実施され、規則的に並ぶ飛鳥時代（７世紀後半）の掘立柱建物跡と、奈良時代前半の８世紀ごろに使われていた庭園遺構がみつかっています。今は、遺跡の一部分が保護されて商業施設（ライフ・コーナン）の下にねむっています。ただし、解説板等は設置されておらず、遺跡の存在もほとんど知られていないのが実情です。

学習会では、区長の平田泰通さんから、土田遺跡が吉野郡の郡衙（ぐんが・古代の郡役所）ではないのか、という質問がありました。近年は、橿原考古学研究所附属博物館の特別展「吉野川紀行」（2009 年）で土田遺跡がとりあげられ、同様の想定がおこなわれていますが、遺跡の継続年代からみて、奈良時代初期に設置された「吉野監」（よしののげん・よしののがん。離宮の置かれた和泉・吉野にのみ設置された役所）に比定する見解が有力といえます。出土品の様相からみても、今後土田遺跡の重要性は高まってゆくだろうとの意見を学習会で述べましたが、参加者からも関連する質問や調査前の当地のようすなど貴重な情報を教えていただきました。

町指定の記念物・ケヤキと、そのふもとの川べりでおこなわれる畝火山口神社の水取り神事についても、地元の高齢者の話を聞くことができました。かつては、天秤桶に水を汲み、片方を大阪の住吉大社に、片方を奈良の畝傍山にもっていった、その水でないと神事ができなかった、という話でした。これは、これまで聞いたことがない話です。平成 21（2009）年には、奈良県地域伝統文化保存協議会によって神事の記録調査が実施され、目新しい情報はないと思っていましたが、このように地元の古老の話も機会を設けて聞き続けることが必要だと感じました。土田の地名と小字名のこと、紀州藩との関係、まだまだ話が尽きない様子でしたが、参加者のみなさんは、遺跡の出土品をじかに手にとり重さや硬さを確かめるなど、土田に貴重な文化財があることを再認識していただいたようです。

学習会は終始和やかな雰囲気で、この機会をつうじ、行政と住民との距離もすこしは縮まったように感じました。今後も土田地紀については、ケヤキの保護等の話し合いを含めて、巡検・調査を進めながら再度学習の機会が必要と感じました。

【その後の経過】

地元の上村さんから、所蔵されていた近世・近代古文書・歴史資料を貸与いただき、現在も整理中です。また、越部の寺坂さんが所蔵されていた、土田遺跡出土の大淀町最古の須恵器（５世紀後半）を貸与いただき、増口地区にある大淀町立杉本記念文化センターの「歴史展示室」で展示させていただくことになりました。

おおよど歴史学習会（土田）

01　区長挨拶（平田氏）

02　主催者挨拶（宮坂課長補佐）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　学習会風景3

06　ミニ展示の風景1

07　ミニ展示の風景2

08　展示の一部（土田遺跡・7世紀の須恵器壺）

・越　部

平成 22 年 8 月 20 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、越部地区の歴史について学習を進めました。戸外に出にくい猛暑日であったにもかかわらず、参加者は 24 名を数えました。

【地区の概要】

越部地区は、江戸時代は紀州藩の領地で、藩の江戸参勤交代に資するため、伊勢南街道に沿って本陣が、そのすこし北側に脇本陣が置かれていました。西に接する土田地区と同様、吉野川に並行して東西に走る国道 169 号線沿いに開けた口越部から、吉野川の支流・越部川の流れる谷（越部谷）にそって南北に連なるまちで、越部川中流域の中越部、越部川上流域の奥越部、越部川にそって北に源流を求めると高取町との境界付近、旧大字田口で狭い谷となり、大淀町唯一の名瀑、安産の滝にたどりつきます。

【学習会の成果】

会場や参加者の手配をしていただいた口越部区長からは、地元の歴史を知らない団地の住民もいるので、はじめての人でもわかりやすい学習会を、との要望を事前に区長からいただいていました。

当地区の歴史を考えるうえで、今回とりあげたのは、縄文時代から古代まで続く越部の遺跡群の調査成果とその歴史的な意義です。

平成 5（1993）年、町立第 3 保育所（現あおぞら保育所）の建設にともない橿原考古学研究所により発掘調査が実施され、縄文時代晩期（約 3000 年前）の墓群と弥生時代の竪穴住居がみつかった越部ハサマ遺跡、そして、平成 9（1997）年に奈良県立橿原考古学研究所により緊急調査がおこなわれ、残りのよい石室 2 基から須恵器、馬具、鉄製武器、単鳳環頭大刀の柄頭を含む金銅製品等がみつかった越部古墳の出土品を橿原考古学研究所のご厚意でお借りし、参加者用にミニ展示をおこないました。参加者には短い時間ですが、学習会の休憩時間を利用して、見学していただきました。

学習会では、上記の遺跡の発掘当時の風景や、借用できなかった出土品をスライドショーでみていただきながら、3000 年前の縄文時代晩期の墓地や、この地を居住のために選びとった 2000 年前の弥生時代の渡来人、国中と吉野の古墳文化をつなぐ歴史を遺した 1400 年前の越部古墳の被葬者、当地にあったと伝える「岡堂」に関連する「堂」の墨書がかかれた 900 年前の素焼きの土師器皿など、いろいろな出土品から越部の歴史に想像をめぐらせていただきました。参加者のなかには、越部古墳の所有者である中谷氏の姿もありました。古墳は発掘調査後、埋め戻されて見学できませんが、氏も、10 数年ぶりに出土品を目にすることができ、喜んでいるようすでした。

越部といえば、口越部に江戸時代の紀州藩本陣（旧前田家・秋山家）・脇本陣（吉條家）がおかれたことで知られています。秋山家住宅（本陣跡）は、すでに明治 13（1880）年ごろには毀損も激しかったようで、街道南側に別宅を残していますが、本陣は時代のながれとともに消滅し、現存しません。それに対し、文化 11（1814）年に建築された吉條家住宅（脇本陣跡）は、街道に面していた長屋門が既に取りはらわれ、周囲の土塀の損傷も著しいですが、住宅兼事務所（知育ブロック「ラキュー」で有名なヨシリツ株式会社の本社）として現在も使用されています。この土塀については近年修理がおこなわれ、景観に配慮した新調がなされています。

また、参加された秋山さんからは、幕末の頃の子どもの遊びなど、貴重な話をお聞きする事ができました。各参加者からも、国道沿いで移り変わりの著しい地区の年中行事についてご教示いただきました。

また、越部在住であった祖母（殿貝さん）が残したという戦中戦後の絵手紙の紹介もありました。これも貴重な越部地区の戦争資料のひとつです。

学習会では、越部の深い歴史を考古学的にみてゆくつもりでしたが、すでに参加者の記憶にしかない、近世から近代にいたる越部地区の民俗史をかいまみることもできました。ひとむかし前の、越部の人々の息遣いが聞こえてきそうです。

【その後の経過】

口越部在住の寺坂さんは、常門（じょうど）遺跡出土の壷棺（弥生時代中期）と、土田遺跡出土の須恵器を所蔵しておられます。とりわけ、常門遺跡でみつかった壷棺は、考古学者・末永雅雄さんが宮滝遺跡の発掘調査（末永雅雄『宮滝の遺跡』）にともない関連資料として図面が公表された著名な資料です。

これらについて、平成24（2012）年、大淀町立杉本記念文化センター内の「おおよど歴史展示室」開設にあたり、資料の主だったものを展示することについてご快諾をいただきました。平成 25（2013）年現在、「歴史展示室」で展示されているのは、常門遺跡出土の壷棺の一部と５世紀末頃に遡る須恵器、６世紀後半～７世紀にかけての須恵器です。

『大淀町史』（1973年）で詳細に紹介されている「太玉神社の祭礼」は、昭和38（1963）年まで橿原市忌部神社の正月用門松を納めていた当社の歴史を物語る貴重な行事ですが、その後の経過は記録できていません。紀州藩ゆかりの地、近世の口越部にどのような人々が移住してきたのか、それぞれの家が名乗った屋号の事も興味深いですが、いまだ聞きとりは不十分です。

奥越部の田口谷では、平成18（2006）年以降、数度の踏査の結果、平安時代に遡る須恵器片、瓦器・土器が採集できることから、付近一帯に遺跡が遺されていることがわかっていました。その後、田口で土砂の崩落があり、崩落個所の包含層が露出しているところで、鎌倉時代の土器・須恵器こね鉢が採集されました（この場所はその後復旧を終えています。また採集資料は大淀町教育委員会が保管しています）。これを機に、大淀町では当地一帯を「（仮称）田口遺跡」として理解し、奈良県の遺跡地図の改定をめざして、その実態把握に努めています。かつて、田口に所在し雄大な伽藍をほこった「安佐谷の寺院群」の伝承も、今後の調査と研究次第で、近い将来に解明される可能性も高まり、おのずと期待は膨らみます。この資料は、町立杉本記念文化センター内の「おおよど歴史展示室」開設にあたり、採集品の一部を展示しています。

越部古墳についても、調査後の埋め戻しを終えて後、再び日の目を見る事を待ちながら、今にいたっています。見学等の要望も多い古墳ですので、せめて、解説板は必要ではと思いつつ、まだ実現にはいたっていません。同地周辺は、縄文時代から弥生時代の集落・墓地、古代寺院推定地（平安時代前期に成立した『日本霊異記』に記す「越部岡堂」）など、実態の判明していない遺跡がねむっています。これらの遺跡についても、今後の地道な踏査記録と、本格的な発掘調査の到来がまたれています。

大きな課題を重ねながらも、順番にそれをクリアしながら、越部地区の「地域文化財」の理解を住民とより深めてゆく必要があります。

おおよど歴史学習会（越部）

01　参加者1

02　口越部区長挨拶（奥田氏）

03　主催者挨拶（宮坂課長補佐）

04　参加者2

05　学習会風景1

06　ミニ展示

07　ミニ展示解説

08　学習会風景2

・馬　佐

平成 22 年 10 月 15 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、馬佐地区の歴史について学習を進めました。当日はすごしやすい涼夜で、区長様の熱心な呼びかけの功もあり、参加者は 28 名を数えました。会場や参加者の手配をしていただいた区長様には、この年（2009 年）9 月 20 日におこなわれた馬佐・牛滝祭の記録調査の際にもお世話をいただいています。

【地区の概要】

馬佐川に沿って軒を並べる馬佐地区へゆくには、吉野川沿いからは馬佐口を北上、高取町側の山間部からは、旧県道の壷坂・田口をぬけてくる道をさらに南下、その東の夙峠を越えれば、比曽・上市方面へぬけます。当地区の歴史を考えるうえで重要なのは、この国中（高取方面）と吉野（比曽方面）を結ぶ街道沿いにある地理的条件です。

壷坂街道（旧県道）をとおって、田口地区をへて馬佐・比曽へとむかう道は、旅人や種修験者をはじめ江戸時代にも頻繁に使われていました。馬佐地区にのこる、「うまみち」の話や人を助ける馬の話、当地に馬屋がつくられたという伝承や、地名に「馬」が選ばれている点からも、「道」から生まれたこの地域の歴史性がうかがえます。

【学習会の成果】

学習会では、妙楽寺境内の薬師堂にまつられている 3 躯の仏像についてとりあげました。この仏像群は、いずれも田口（阿佐谷）に江戸時代まであったと伝える寺院群に安置されていたものです。平安時代にさかのぼる十一面観音、地蔵菩薩の立像と、室町時代に制作された堂本尊の薬師如来坐像、薬師堂に懸る江戸時代の万治 2 年（1659）の銘をもつ釣灯籠は、伝承どおり、すべて田口の地から移されたと考えてよいでしょう。これらの仏たちが、田口地区から上市の尾仁山へ運ばれる途中、馬佐の地で動かなくなったので薬師堂を建ててまつったとの伝えも、参加者から聞かせていただきました。

馬佐地区には、お地蔵さんのちいさな祠を含めて神社が比較的多くあります。氏神・天照皇太神宮と、その境内社として八阪神社（牛滝神社）、稲荷神社、弁天社などがあり、ことに弁天社はめずらしく、大淀町内でも岩壷地区に求められる程度です。このような祠の多さは、当地の住民たちの氏神が、ひとつに統一されず、さまざまな信仰の受容がゆるされた結果といえ、地域の成立のありかたを考える興味深い事例といえます。

また、参加者からは、大切に家で保管されているという、田起こしの際に牛に曳かせる耒（スキ）の写真を見せていただきました。ともすれば忘れられがちな民俗文化財が、ムラにきちんと残されていることを知ることができました。

また、供物の供え方が特異な氏神・天照皇太神宮境内社の八阪神社は、牛の守り神（牛滝さん）として知られていますが、その秋祭（9 月・牛滝祭）についても、詳しい話を教えていただきました。今は牛をかう農家も絶えてしまいましたが、馬だけでなく牛もまた、かつての生活文化（運搬・耕作そのほか）に密着した人とのかかわりの深い動物でだったことを、この祭礼が伝えている点で貴重です。

【その後の経過】

妙楽寺は、坊守がおられるごく普通の寺院ですが、道沿いにあって薬師堂に古仏を持つことから、町内ではハイキングで立寄る見学者も多い隠れ寺です。今後の拝観者への対応も、寺や地元まかせにせず、行政も一緒に考えてゆかねばなりません。

おおよど歴史学習会（馬佐）

01　馬佐区長挨拶（吉田氏）

02　主催者挨拶（宮坂課長補佐）

03　学習会風景その1

04　学習会風景その2

05　天照皇太神宮の鳥居

06　牛滝祭のようす（平成22年9月）

07　牛滝祭供物(平成22年9月)

08 妙楽寺薬師堂の十一面観音立像

・新　野

平成 22 年 12 月 17 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、新野地区の歴史と民俗について学習を進めました。寒い夜であったにもかかわらず、区長および関係者の呼びかけに応じて 20 名を越える参加者があり、地区外（桧垣本）からの継続参加者もいました。

【地区の概要】

新野地区は、吉野川北岸の街道沿いにひろがるまちで、北側にそそりたつ丘陵地（槇ヶ峯・寺山）にもかつて集落が点在していました。農耕地は少なく、広い土地といえば河川敷、畑地といえば、丘陵を開墾してつくる典型的な街道村です。この地区は、明治年間、森栄蔵、仲川房次郎といった奈良県を代表する政界・財界の士を生んでいます。彼らはまさに、地域の風土がはぐくんだ逸材ともいえます。

【学習会の成果】

学習会では、まずスライドをまじえて、平成 18（2006）年に橋本藤三郎さん（故人）より寄付をうけて町有地となり、平成 19（2007）年１月に町指定史跡となった槇ヶ峯古墳について考えていただきました。

槇ヶ峯古墳は、奈良県に３例しかない「石棚」を石室内にもつ古墳のひとつです。石棚とは、横穴式石室の奥側に設けられた板石による棚状の施設で、石棚を有する石室の分布の中心は、紀ノ川河口域の和歌山市・岩橋千塚古墳群（国特別史跡）にあります。

この内容を深めるため、他の２例（下市町・岡峯古墳、平群町三里古墳）の映像も紹介しながら、古代の紀ノ川流域と吉野地域との交流や、新野・槇ヶ峯古墳と対岸の阿智賀・岡峯古墳をはさむ吉野川中流域の歴史的な重要性について紹介しました。

槇ヶ峯古墳の周囲には、新野稲荷の境内にのこる稲荷山古墳をはじめ、すでに所在不明となった多数の、横穴式石室をもつ古墳があったといいます。槇ヶ峯古墳への見学者が、道がわからず地区の方に訪ねるということがままあるようで、見学路にいたる数か所に、案内標識を立ててほしいとの要望があり、今後の古墳の調査・整備・活用を含めて背中をおされたかっこうとなりました。参加者からは、新野地区の共同墓地の入り口、六地蔵付近も古墳なので、土地の持ち主と相談して調査してはどうかという意見や、古墳群をめぐるハイキング、見学会などの催しも企画してはどうか、という提案もありました。

新野の氏神、新野八幡神社の祭神は、女神（神功皇后）であり、安産の神といいます。御幣に米（フングリ）をくくりつけて、それでおはらいをしてもらう、あるいはその米を食べると安産になるとか、昔から絶やさず秋祭に甘酒をつくっているという話を聞くこともできました。また、地区外からの安産祈願者も多いとか、先のハイキングコースとからめて、地区のＰＲに活用できないかという声もありました。参加者の声からは、当地も少子高齢化が進み、地域の管理、年中行事の継承が困難になりつつある状況もうかがえました。また、地区の昔を知る、齢 90 才をこえる古老への聞き取りもしてくれないかとの声もあがりました。行政が地元住民と協力してとりくむべき課題が深められました。

【その後の経過】

槇ヶ峯古墳は、平成 22（2010）年１月に測量調査が実施され（平成 23 年に報告書『平成 19～22 年度大淀町文化財調査報告』が公刊）、同年、懸案となっていた解説板の設置もなされました。今後、古墳の詳細な調査をおこない、地元住民と協力しながら「史跡公園」として利活用し、地域の活性化につなぐための議論を模索してゆく予定です。

おおよど歴史学習会（新野）

01　新野区長挨拶（岡田氏）

02　主催者挨拶（宮坂課長補佐）

03　会場設営のようす

04　学習会風景1

05　学習会風景2

06　学習会風景3

07　会場のようす

08 槇ヶ峯古墳の現状

・北　六　田

平成 23 年 2 月 18 日(金)に実施したおおよど歴史学習会では、北六田地区の歴史と文化について学習を進めました。非常に寒い夜であったにもかかわらず、区長および関係者の呼びかけに応じて 30 名弱の参加者がありました。

【地区の概要】

北六田地区は、吉野川を挟んだ吉野町六田と一対になる街道沿いのまちです。吉野軽便鉄道の開通（大正元年）で、終点「吉野駅」のターミナルが北六田に完成し、それ以降の人口増加に伴う景観が、今のまちの基盤になっています。

【学習会の成果】

学習会ではスライドをまじえて、町指定・柳の渡しについて考えていただきました。吉野川の渡しは、金峯山中興の祖とされる醍醐寺の僧・聖宝がひらいたとされます。その渡しの場所は確定されていませんが、有力な候補地として、本町北六田から吉野町六田にかけての、渡船が往来したとされる「柳の渡し」付近が想定されています。『万葉集』をはじめ古歌にも歌われた「六田の淀」もこの付近と考えられ、約 300 年ほど前（18 世紀初頭ごろ）に製作された「現光寺縁起絵巻」（町指定文化財・世尊寺蔵）は、吉野川とシダレヤナギ、筏を渡し竿をさす船頭の姿を描いています。また、江戸時代にはここを渡ったという記録が多くの文献に出てきます。約 100 年前（明治末年～大正）の古写真にも、渡しと仮橋のある景観が映っています。まさに、吉野川の渡しを語るうえで、もっとも重要な地域が、柳の渡しとその周辺。ということになります。

学習会ではこれらの資料をスライドショーでみながら、100 年前に吉野ではじめて汽車が登場し（吉野軽便鉄道の開通）、その終点となった吉野駅（現在の近鉄六田駅）付近が帰着駅としてにぎわっていた様子を参加者と共に思い浮かべました。

『大淀町史』（1973 年）の「古老聞書」によると、北六田地区は対岸の吉野町六田の分村とみる考え方が伝えられています。これは、六田地区の毘沙門天が北六田に勧請され、その「古座」の端緒になったという地元の伝承ともあいます（「新座」は江戸末期以降、春日から勧請した氏神の櫛屋神社）。この古座創設の時期は明らかにし難いですが、安養院の脇に立つ、北六田でもっとも古い年号を刻む明暦 2（1656）年の庚申塔などが、手がかりになるかもしれません。なおこの庚申塔は、学習会でも紹介しましたが、銘の入った比曽石製の石塔としても、また町内の庚申塔としても最古のもので、貴重な地域文化財です。

参加者からは、北六田の渡し付近から比曽出口までは川岸に道がなく、対岸へ渡る道が主要な交通手段であったという話も出ました。また、柳の渡しの象徴となっている天明年間の大石灯籠も、昔はもっと上流に建っていて土台も立派だった、という話もうかがいました。今の風景、現状のままで「柳の渡し」を顕彰してゆくことより、できるだけ「本来あった渡しの姿」に戻してゆくことが地元の希望でもあり、また、正しい「史跡」としての整備活用になると感じました。

【その後の経過】

平成 24（2012）年は「吉野軽便鉄道 100 周年」の年で、「旧吉野駅」をかかえる北六田地区も多くのイベントで盛り上がりましたが、生育の安定しない柳の枯死も続いています。

今後、柳の渡しを含め、北六田地区とその周辺の歴史的な移り変わりを丹念に調べたうえで、伝承地を含む吉野川の渡しの保存と活用を考えてゆかねばなりません。

おおよど歴史学習会(北六田)

01 主催者挨拶 (高橋教育次長)

02 北六田区長挨拶 (小西氏)

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　柳の渡しと美吉野橋遠景 (西から)

06　柳の渡しか (世尊寺蔵「現光寺縁起絵巻」より)

07　安養院脇の庚申塔 (明暦2年銘)

08　安養院境内・毘沙門天の祠

・比　曽

平成 23 年 6 月 17 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、比曽地区の歴史と文化について学習を進めました。区長および関係者の呼びかけにもかかわらず、参加者はこれまででもっとも少ない計 7 名でした。案内・日程調整不足が反省点としてのこりました。

【地区の概要】

吉野川に面し、比曽川にそって龍門山塊にひろがる南北に長い比曽地区は、南から出口（比曽出口）、比曽、上比曽にわけられています。飛鳥時代に創建された「史跡比曽寺跡」が上比曽にあり、古来から修験者の修行場としても重要な地域です。

【学習会の成果】

学習会ではまず、史跡比曽寺跡、県指定の太子堂・木造十一面観音立像、町指定の現光寺縁起絵巻ほか、多くの文化財を所有している世尊寺（比曽寺）について、スライドをまじえて考えてもらいました。比曽寺跡の発掘調査は近年大きく進み、遺跡としての実態も明らかになりつつあります（大淀町教育委員会編 2008 年・橿原考古学研究所編 2009 年）。

続いて、出口地区に石切り場を残す比曽石製石造物の事について、また、比曽地区の民俗行事や興味深い地名について話を進めました。

小字カンジョ（ウ）の地名は、比曽地区を南北に流れる比曽川の流路の一画に「カンジョの滝」として残されています。ここで役小角が修行をしたという伝承もあり、話し合いを進めるなかで、この滝が比曽地区（上比曽、比曽、出口）を南北にわける、文化的な境界になっているのではないかという見とおしを得ました。カンジョウカケ（ツナカケ）がおこなわれていた可能性もありますが、今はそのような手がかりになる民俗の伝承も残っていません。

上比曽の地には世尊寺があり、氏神としての天照大神社があり、タタキワラで新婚を祝う秋の行事（いのこまつり）も残されています。いのこまつりは、出口、比曽地区ではまったく伝わっておらず、逆に出口地区では、江戸時代になって吉野郡内を中心に数多くの石造物をうみだした比曽石（石英安山岩）の石切り場がタイナ谷にあり（出口地区にある和田石材店の祖先が開いたと伝えます）、「石切神社」があったりと、石工（いしく）の文化に特化したような遺跡や伝承がのこされています。また出口地区は、かつておこなわれていた吉野川の灯籠流しなど、川の文化を伝える場所でもあります。大字比曽のなかにある、小地域的な特質を探しだすことができたのは、学習会の大きな成果でした。

【その後の経過】

学習会の数カ月前、平成 23（2011）年 3 月 11 日に東日本大震災が発生しました。地域の歴史と文化が、自然の営為の前では一瞬にして壊滅することを目の当たりにしました。世尊寺でも、きたるべき災害に備えての文化財防災対策を考えはじめています。またそれと並行して、世尊寺開山以降の聖教関係（曹洞宗）資料の調査にも着手しました。今後は、世尊寺の寺院史とその文化財の保存・継承を総合的にまとめる作業が課題です。

町内でもこの地域にしか残っていない「いのこ」の行事については、平成 23（2011）年 11 月に記録調査をおこないました。新婚の夫婦が少なくなり、この行事をおこなう回数が減ってきています。その保存と継続について、さらに地元住民と話し合う必要があります。比曽石製の石造物の調査は平成 18（2006）年から継続していますが、石切り場についての聞き取り調査も含めて、まとまった「成果報告書」の作成が待たれています。

おおよど歴史学習会（比曽）

01　主催者挨拶（上西課長）

02　学習会風景1

03　学習会風景4

04　スライドの解説

05　出土品の解説

06 世尊寺（山門）

07　世尊寺・お太子さんのゴクまき

08　「いのこ」のようす（2011年11月）

・増　口

平成 23 年 8 月 19 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、増口地区の歴史と文化について学習を進めました。区長の熱心な呼びかけに、参加者はこれまでで最多の計 57 名となりました。ところが、準備した資料が 30 部しかなかったため、不足分を後日、区長に届けることになりました。うれしい反面、このような状況に適切に対処できなかったことも課題として残りました。

【地区の概要】

増口地区は、大淀町の東南部、吉野川に沿った東西の街道筋と、町中で分岐して北の中増・西増地区へと延びる街道筋にひろがるまちです。比曽川沿いで「比曽」地区に対し伊勢南街道へと合流する場所に「出口」地区があるように、増口地区も、増川にそって「増」地区に対する「出口」地区にあたると考えらます。

【学習会の成果】

学習会の前半では、まずスライドをまじえて、伊勢南街道の町並みが残る地区の特徴と、各所にのこる石造物の銘文や碑文を紹介しながら、ふだん目につかない意外なところから、増口の歴史について考えてもらいました。続いて、地区内を流れる「増川」にかかる「みずわけばし」の由来について、ご存じの方がおられるかどうか聞いたところ、半数以上が今晩はじめて知ったとのことでした。また、氏神・水分神社は、正面鳥居から本殿へと続く階段に、地元の石材（比曽石：石英安山岩）を大量に用いており、また、「上市筏連中」「明和四（1767）年」「文政 12（1829）年」の銘も残されている、寄進者のわかる貴重な地域文化財として紹介しました。これについては、同様の伝承を知っていると、地区の古老に多くのことを教えていただきました。この水分神社の氏神が、旧上市村の「古市場」より流れ着いたという伝承は、地区の中では比較的よく知られているようです。また、「ひいおじいさん」からの聞き伝えとして、増口の本来の産土神として「薬師」を祀っていたという話も地元の方に聞くことができました。この「薬師」は、現在水分神社の境内に一宇を残すものです。地域の神仏習合の一側面がうかがえ、興味深い話です。

学習会の後半では、まだまだ把握されていない石碑や古文書がある事を参加者から教えていただきました。例えば、大正 3（1914）年の銘がある、中増・西増・増口の 3 区で増口地内に建てた「吉野郡製茶業記念碑」の事、増口と密接なつながりのある吉野町上市に残る膨大な宮座文書などです。また、多くの文人墨客を輩出した増口の近代人物史、とりわけ、「大淀」の名付け親でもある大北作治郎（大北温）といった文人たちをもっと詳しく調べてほしい等、多くの教示、要望もいただきました。

【その後の経過】

平成 24（2012）年 9 月、増口区内の町立杉本記念文化センターに「歴史展示室」が開設され、地元との協働事業が課題となっています。増口地区も少子高齢化のいちじるしい地区ですが、地元の努力で地蔵盆（8 月 24 日）などの年中行事も盛況におこなわれています。

かつて地元でおこなわれていた、伝統技術（大谷家の「ちょうちん」作り）、虫子窓を残す伊勢南街道沿いの街並み、古刹・専立寺（俳人・哲学者の大峯顕さんがおられます）、そして、地区の各地に残る歌（句）碑や、地域の魅力を見直しながら、行政・地域住民がともに協力して「協働のまちづくり」が進めてゆけそうなモデル地域といえます。今後は、地域の魅力をみつけだす「マップ作り」なども、地元と協力しながら進める予定です。

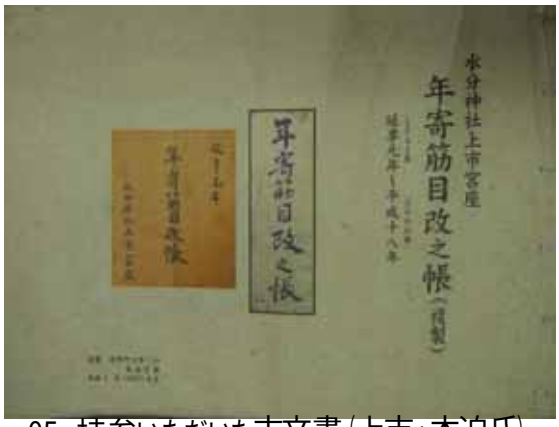
おおよど歴史学習会（増口）

01　増口区長挨拶（大谷氏）

02　主催者挨拶（上西課長）

03　学習会風景2

04　学習会風景3



05　持参いただいた古文書（上市・本迫氏）

06　古文書をみる参加者

07 蔵のならぶ増口の街並みを歩く（2012年6月）

08　ちょうちん作りの道具

・西　増

平成 23 年 10 月 21 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、西増地区の歴史と文化について学習を進めました。区長の熱心な呼びかけに、参加者は約 20 名となりました。

【地区の概要】

西増地区は、増川上流部の盆地に広がる農山村です。山間部にあって隣接する中増地区と並んで広い農地を有していますが、少子高齢化にともなう問題もすくなくありません。

【学習会の成果】

学習会の前半では、まずスライドをまじえて、①壷阪寺の隠居寺と伝えられている東福寺の仏像（千手観音坐像は壷坂寺より招来といいます）にまつわる由来、②古文書で伝わる、関ヶ原の戦いの頃に生きた怪力・久右衛門、③西増地区西部のタイナ谷の石切り場から供出される石材としての比曽石とそれにかかわった豪商・川本家、④伊勢南街道の往来とかかわる高見地蔵、などを紹介しながら、西増の歴史について考えていただきました。

川本家は、江戸時代、川上村より当地へ居をかまえたとされ、その親戚にあたるという理由から、地元の郷土史家であった大口善信が、その墓地を整理しています。付近一帯に「川本屋敷」という地名を残す富豪でした（寛文年間にさかのぼる銘をもつ石塔数基は、墓石としては大淀町で最も古いものです）。この川本家と、タイナ谷の比曽石の石切り場の開拓がかかわるのではという提案を学習会でおこないました。

高見山を向く高見地蔵は、地元でよく知られている地蔵ですが、そのいわれについてはすでに地元住民のあいだでも定かでなくなっているようでした。今後も、この位置と向きを変えずに、残していってほしい旨を、参加者、地区住民の皆さんに伝えました。

休憩に続いて、氏神・三神社や地区内の祠、小字「古宮」の由来について、ご存じの方がおられるかどうか聞いたところ、半数以上が今晩はじめて知ったとのことでした。山の神を祭神とする三神社については、貞享元（1684）年銘の古い雨乞い灯篭がのこされ、地区内南方の古宮にあるホテンド（保天童）もまた、「山の神」をまっているとのことでした（『大淀町史』では「龍神」と報告されています）。また、秋祭ではかつて宮相撲もおこなわれたとのこと。これについて、「チカラモチ」と称して俵をかつぐ行事もあったと『大淀町史』には記されています。しかし今、この宮相撲はおこなわれていません。西増の宮相撲の発端は、西増地区に伝わる怪力男・久右衛門の伝承にゆかりがある可能性も考えられ、ぜひとも復活してほしい行事だと参加者に伝えました。

他にも、「増」を今でも「マアシ」といい、かつて古文書では「摩志」と書いたりしたのはなぜか、という質問もありました。同地区のホテンドや、タイナといった、古代にさかのぼる可能性のある地名、漢字よりも音で伝えられてきた地名が、当地区に現在まで残っていたことを示すのではと答えましたが、詳しい研究はこれからの課題です（「増」は「雄略記」の狩り場の野「（御）馬瀬」→馬司（馬飼）→摩志の発音転訛と理解されています）。

【その後の経過】

東福寺の境内にのこる石塔の中に、安土・桃山時代にさかのぼる「文禄三（1594）年」と読める銘をもつ比曽石製の石塔があります。「久右衛門」の時代にさかのぼる西増地域の石塔がのこされていることも、この地域の歴史をひもとく重要な手がかりとして見逃せません。

おおよど歴史学習会（西増）

01　主催者挨拶（上西課長）

02　学習会風景1

03 学習会風景2

04 学習会風景3

05　学習会風景4

06　学習会風景5

07　久右衛門の事跡を記した古文書

08　高見地蔵

・中　増

平成 23 年 12 月 16 日（金）に実施したおおよど歴史学習会では、中増地区の歴史と文化について学習を進めました。区長の熱心な呼びかけに、参加者は約 40 名を数えました。

【地区の概要】

中増地区は、大淀町東北部の典型的な農山村です。稲作も盛んですが、江戸時代から茶の生産が盛んとなり、茶畑の景観が美しい「増茶の里」としても知られています。

【学習会の成果】

今回の学習会では、話の内容を次の４点にしぼりました。ひとつめは、近年新しく発見され、奈良県遺跡地図に新規の遺跡地として登録された「中増下垣内遺跡」の紹介です。2005 年以降、山本昭緒さん（中増区長）の熱心な踏査により、縄文時代から古代にかけての遺跡であることが判明した当該遺跡については、すでに報告文も作成されています（山本・松田「奈良県吉野川流域の古代遺跡―吉野郡大淀町中増地区の踏査―」『青陵』2008 年 所収）。ふたつめは、中増地区に残る「地域文化財」の紹介です。共同墓地にたつ江戸時代の正徳年間の比曽石製「南無阿弥陀仏」供養塔は、町内にのこる数少ない 18 世紀初頭の古式供養塔のひとつ。近年地元の尽力により復元建立されています。また、区内の各寺院（本長寺、安定寺、安養寺および野尻薬師堂）にのこる仏像、石仏をはじめとする各種文化財も、当該地と金峯山寺や近隣地区との交流関係を示す貴重な生き証人です。

みっつめは、今回新発見となった中増区の古文書群です。これは最近、東京都立川市の国文学研究資料館に保管されていることが判明した文書群で、11 月 23 日に山本区長および松田が初歩的な調査と主だった文書について記録撮影をおこない、今回がその最初の成果発表となりました。この文書群は、江戸時代初期の寛永年間（17 世紀初頭）から大正年間（20 世紀初頭）まで、江戸時代全般と近代前半期にわたる中増村の全容を探るうえでもっとも基礎的な史料となります。町内では文禄年間（16 世紀末）の古文書を有する持尾・迎居家文書につぐ古さをもち、また、保存状況も良好、質量ともにすぐれた地域文化財です。古文書の中には、この地に宇治茶の製法を伝えたとされる茶司「忠次郎」（安養寺境内に天保９年の命日をきざんだ供養碑があります）の名が記されています。

よっつめは、町立図書館の上田裕介さんによる安養寺所蔵の梵鐘鋳造にかかわる古文書「鐘鋳直ニ付諸事附出帳」の解説です。上田さんは天理大学で古文書解読の訓練を積んでおり、また解説も丁寧で、敬遠されがちな古文書の世界をわかりやすく参加者に読み解いていただきました。以上の紹介とあわせて、会場からのさまざまな声もいただけました。古文書解説についての疑問点、膨大な古文書がどうして東京にあるのかという疑問点、こういった学習会を今後も継続してほしいという要望など、多くの宿題をいただきました。

【その後の経過】

下垣内遺跡については、山本さんにより一通りの採集資料の整理が済み、５世紀代にさかのぼる須恵器の存在、「吉野郡院」の解明といった点にも、期待がもたれます。

中増村文書については、東京都立川市の国文学研究資料館に所蔵されていることが難点ですが、年一回、写真での記録撮影を継続し、調査を実施しています。安養寺文書も上田氏による翻刻が終了し、今後詳しい検討に入ります。すこしづつ整理作業を進め、再びこの地域にその成果を還元できるよう、報告書や地域紹介の冊子や本づくりなども射程に入れながら、その保存・活用方法も考えてゆきたいと思います。

おおよど歴史学習会（中増）

01　中増区長挨拶（山本氏）

02　主催者挨拶（上西課長）

03　学習会風景1

04　学習会風景2

05　会場のようす

06　古文書の解説風景（大淀町立図書館・上田氏）

07　質疑応答風景

08　ふれあい交流館の活用状況

5　まとめ ―地域文化財へのまなざし―

平成 19 年度（2007 年 6 月）からあしかけ 5 年間（計 24 回）の計画で実施してきた「おおよど歴史学習会」は、これでひとまずの区切りを迎える事ができました。

この学習会で実践された試みが、大淀町を含む「吉野」の地域文化史の再認識につながると思っています。また歴史的な背景は異なっていても、日本各地の「歴史学習会」の場で、このような試みが一つの「見本」として活用される事を願います。

ここでは、計24回の歴史学習会を通じて町内の各地域を見て回り、旧大字21ヶ所で地域の声を聞きながら考えた事を整理し、この報告書のまとめにしたいと思います。

専門職の視点から

平成19年から23年の間、住民と共に足元の歴史をまなぼう、そしてそれを将来のまちづくりに活かそう、というコンセプトで始めた学習会は、当初、県内でも珍しい試みの一つであったといえます。この学習会は、思えば事業担当であった学芸員（技師）自身の、「行政職員としての地域（地区）の総合的把握」を兼ねていました。奈良県内で文化財担当者として文化財業務をすすめている多くの職員のなかでも、発掘調査や記録保存といった日々の業務に追われるなかで、専門職としての立場から住民と同じ目線で要望をうかがい、地域の文化財をみて、それをまちづくりにどう生かそうか、といった具合で、多くの方々と語り合うという機会はそう多くないように思います。

地域政策と文化財

吉野川水系と大和川水系に足をかけて、農村・山村の交差する地域的特質をもつ大淀町内の各地域の、そのほとんどは、少子高齢化と過疎化に悩まされています。あと数年もすれば、子どもとその若い両親は皆無となり、そして、経験豊富な高齢者もいない、という状況が生まれ、現役世代の負担も増大する事は十分に予想がつきます。そんな地域の停滞化に苦心し、多角的な地域政策を図ろうとしている地域自治体やコミュニティに対して、「文化財」という考え方がどれほど浸透するか、どんなふうにかかわってゆけるのか、というとりくみ方の模索も、この学習会の課題でした。

その地その地で長年にわたって守り伝えられてきた「地域の宝物」から、「地域文化史」をどのように復元し、地域の問題に活用できるのか、そのために、それぞれの地域的特性が生み出し、のこした「地域文化財」を丁寧に拾い出し、再評価し、再認識するという作業が、地域形象と活性化にもつながるという思いで、学習会を継続させてきました。

この地域政策についての考え方はとりわけ、平成22（2010）年に文化庁の支援をうけて大淀町教育委員会で実施した「大淀町地域伝統文化活性化事業」によって、大きな確信をもつことができました。その成果は既に公刊されていますが（大淀町教育委員会編『大淀町の民俗と伝統文化』平成23年刊行）、その「あとがき」で岸田文男さんによせていただいた一文はそれを象徴しています。

つまり、「地域への（愛着の）まなざしを深めることが、地域を守り伝えてゆく原動力（地域の底力）を生みだす」ということです。文化財の保存と活用が、地域の保存・継承と活性化につながる。これを手がかりに「地域文化財」が、地域の基盤づくりと再生に、寄与できる意味を探ってゆけるのではないでしょうか。

地域文化財とは

この学習会でとりあげた文化財（そこには伝承も含まれます）は、従来の指定文化財保護制度のカテゴリーではとらえきれない（まかないきれない）、いわば一般文化財が対象となります。それらを大淀町のなかで、学習会をつうじて「地域の宝物」として見なおし、「地域文化財」という枠組みでとらえようと考えはじめたのは、学習会を継続して半ばをすぎた、平成21（2009）年の冬頃でした（パンフレット『大淀町の文化財』地図でみる大淀町の歴史と文化１　平成21年3月刊行）。

「地域文化財」とは何か、という問いは、今日本の各自治体やコミュニティで議論がなされている最中ですが、一言でいえば「地域に底力を与える文化財」と理解しています。とりわけ「文化財」という時、一般的に「文化財級」と称されるイメージや、今日多用されている「資源」という言葉よりも、ひろく「文化的財産」としての価値をもつものと理解する「文化財保護法」の原点にたちもどって、見なおしてゆく必要があります。また、それによって、「地域文化財」が地域コミュニティの「心のよりどころ」となり、今後も愛着とともに継承されてゆく可能性を得ることができるのではと考えます。

日本国憲法にもとづく戦後の政教分離政策以降、日本の文化をささえてきた信仰の場（神社・仏閣など）、かつての「心のよりどころ」が公共の枠から追い出されるようになり、今日の地域の過疎化に従い、それが放置されはじめている現代社会をみつめるとき、これらを地域の枠組みで包括し、とらえなおした「地域文化財」のあり方から地域を見なおす作業は、これからのこの国の文化財行政を考えるうえで避けては通れない道となります。

つまり、従来どおりの指定文化財制度によりかからない「次世代の文化財の保存と活用」を模索すること、既存の制度と共存しながら、よりひろい範囲での「地域文化財」を守り伝えてゆくための制度づくりをはじめることが、今必要なのではないでしょうか。

災害をこえて伝えるもの

平成23（2011）年３月の東日本大震災と、同年９月の台風12号による紀伊半島の大水害は、多くの人命とともに、地域に残る文化・文化財を滅失させ、復興はまだ果たされていません。皮肉なことですが、このような災害に直面した時、文化財保護制度では対象とされていなかった、神社・仏閣や祭礼などの「地域文化財」が、将来の地域の再生・復興に貴重な指針となる、という事を、私たちを含む多くの地域住民は深く学びました。

これらの「地域文化財」を、地域の未来のためにどう残してゆくか、どのように災害をこえて「記録」「記憶」として守り伝えてゆくか、という問題も、私たち現代人の大きな地域的課題となってきています。このような議論が、地域ごとに、地域間で随時深められることが期待され、またそのなかに「地域文化財」がより活かされることも期待されます。

さまざまな住民の立場と行政の役割

大淀町じしんがかかえる大きな問題は、新住民（いわゆるニュータウンの住民）が、その地域文化の継承と活性化にどのようにかかわってゆくか、ということです。

この学習会では、1970年以降に建設がはじまった歴史のあさいニュータウン（団地）地区を、学習会の対象地域とはしませんでした。しかし、ニュータウンそれじしんもすでに‘オールドタウン’へと変容しつつある情勢で、そこに住み続ける住民たちのアイデンティティの模索もはじまっています。大淀町域の古い「まち」と、新しい「まち」が、共に

思いを寄せることのできる「心のよりどころ」としての「地域文化財」のあり方を、今後もおおいに議論してゆく必要があります。

少子高齢化という問題もそれに拍車をかけています。山間部の過疎化が急速に進行してゆく「地域」にあって、行事に参加する子どもたちの数は年々減少してゆきます。伝統的な生活文化がすこしずつ失われるなかで、祭りの日だけは他所からの見学者の来訪で地域が活性化する、という今の地域の姿から、「地域文化財」の継承と活性化をどのようにとらえてゆくかも問われています。地域が主体となるまちづくりや、「文化財」というとらえ方の見なおし作業は、いずれにしてもそれが地域に根付き、継承されていなければ、早晩、消えてしまうものです。そうならないよう、文化財保護・活用をになう行政担当者（教育委員会）もまた、主体的にこの「地域文化財」の理念を更に膨らませ、継続させ、深めてゆく事が肝要です。

最後に、本事業の実施にあたり、ご尽力を賜りました大淀町内の各区長、町政関係者や、本事業を支えて下さった町内の文化財所有者および各種団体、そしてなにより地域の文化財を守り伝えてきてくださった地元の方々と、学習会に参加していただいたみなさんに深い感謝とお礼を申し上げます。

概要版

※※

おおよどの地域文化財を学ぶ

―平成19～23年度「おおよど歴史学習会」事業成果報告書―

平成25年3月31日　刊行

編 集　奈良県大淀町教育委員会

発 行　奈良県大淀町教育委員会（638－0812　奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090）

TEL 0747－54－2110　FAX 0747－54－2112

印 刷　岡本印刷所（639－3126　奈良県吉野郡大淀町新野342-2）

TEL 0746－32－2166　FAX 0746－32－2188

※※※